
バカとテストと召喚獣 ~蒼い瞳の従姉~

G A U

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣 ～蒼い瞳の従姉～

【Nコード】

N7557X

【作者名】

GAU

【あらすじ】

明久と同じ日同じ時間同じ病院で生まれたイタリア人ハーフの少女、夏目綾香は、その自由奔放且つ傍若無人な性格で彼を振り回す！

双子同然に育った彼と彼女のドタバタコメディー

この作品はバカとテストと召喚獣二次創作です

ぶろろーぐ（前書き）

気が付いたら書いてました。

読んでくれる方が楽しんでくれたら幸いです

ぶるるーぐ

とある家族向けマンションの一室。

春の陽気にあてられ、その少年は惰眠をむさぼる。

しかし、ベッドの上の盛り上がりは、一人分にしては大きい。

「んん……」

窓から差し込む日差しに、少年が寝返りを打つ。

その鼻腔を、柔らかい匂いがついた。

「ん？ んんん？」

眉根を寄せた少年が身じろぎしようとする、全身が柔らかい何かで締め付けられる。

「んん？ な、なに……」

軽く寝ぼけたまま眼を開いていくと、視界いっぱい金色が広がる。

ぼんやりしながら“それ”へと手を伸ばし、軽く撫でる。

柔らかい金色の手触りは気持ちよく、なんとはなしに撫で続ける。

「ん、ううん……」

不意に気持ち良さげな声が聞こえた。つづけて体にまとわりついた柔らかいものもどかしそうにうごめく。

そして、金系の向こうに白い肌が見え、閉じられた眼の長いまつげが揺れた。

「……………」

その“顔”を見た瞬間、少年吉井明久の霞がかかった頭がクリアになっていく。

すると、自分のみぞおちのあたりに二つの柔らかい膨らみを感じとり、意識は一気に覚醒した。

「……………」

状況を瞬時に把握したところで、金系の向こうの瞼が開き、蒼い

瞳が表れる。

「……………」

「……………」

数瞬、見つめ合う二人。そして、蒼い瞳の少女が天使のように、ふんわりと笑った。

「おはよ アッキー」

その笑顔に朱を散らす明久。

それを見た瞬間、天使の微笑みが、悪魔の笑いに变化した。

「なーに？ アッキー。おねーさんに欲情した？」

「………… おねーさんもなにも同じ年だよね綾香と僕は」

少女、夏目綾香の嫌らしい笑みを見てゲンナリとなる明久。

「そもそも何で綾香が僕のベッドに……………」

「あー、抱き枕 明久 が気持ちよさげだったから、つい」

「なんだか別のもののルビに僕の名前が使われた気がするんだけど……………」

悪びれることもなくのたまう綾香に、明久がジト目になる。

「またまたそんなこと言っつて、おねーさんのおっぱいの感触楽しんでくせに」

「………… 否定はしない」

吉井明久と夏目綾香は従姉同士だ。

同じ日同じ病院で同じ時間に生まれた二人は、双子のごとく時間を共有して育った。

ゆえにお互いのことはたいてい解っつてしまう。

下手に誤魔化そうものなら、綾香はアダルトコードぎりぎりのボデイツチを駆使して明久に吐かせようとするだろう。

そして、このイタリア人ハーフの娘は、明久の反応を見て喜ぶのだ。

故に、素直に吐いた方が実害は少ない。

「ちえー、つまんねーのー」

言いながら身を起こし、ベッドから降りる綾香。

そのまま軽く伸びをしてからあくびを一つ。

その様子を見て嘆息した明久は身を起こし、ハツとして綾香の姿を見た。

いまの綾香は、私立文月学園女子の制服に身を包み、肩をグリグリ回している。たわわに実ったソレのおかげで肩こりがヒドいという話を聞いた気がしたが、今はそんなことはどうでもよかった。

急いで首を巡らし時計を見やる。

「……………」

「ん？ アツキー、どしたん？」

時計の短針長針の行方に啞然呆然となる明久。

その様子に綾香が首を傾げる。

「ち……………」

「ち？」

「ちこくだーっ!？」

「あ、ほんとだ」

焦った様子の明久にのんびり同意する綾香だった。

ぶろろーぐ (後書き)

いかがでしたか？

まあ、続きを書くかは反響次第かな？
突発ネタですし。

それでは失礼します

綾香のぶろふいる

夏目綾香 なつめあやか

身長：170cm

体重：ないしょ

B 92

W 63

H 93

明久と同じ日の同じ時間同じ病院で生まれた、イタリア人ハーフの従姉。

明久の実家と綾香の実家は数百メートルほどしか離れておらず、互いの家を遊び場として時間を共有しながら育った。

ほとんど双子同然に育ったことから、家族同然の気安さがあり、明久とはアイコンタクトすら不要なくらい互いの考えが読める。

小さい頃から活発で、明久とともに男の子に混じって泥だらけで転がり回るように遊ぶ子供だった。

だからといって女の子と合わない訳ではなく、明るく元気で男女ともに友人が多いタイプ。

そのため勘違いされることが多く、小学校の時分から告白されることが多かったらしい。

そのすべてを断り、現在に至る。

外見は金髪碧眼で、顔立ちはどこらかといえれば日本人のもので、瞳の蒼さが際だつような大きな目をしており、肌もきめの細かい白い肌をしている。

もつとも活発な代償として、生傷が割とあつたりするが。

長く伸ばした金髪はハーフとは思えないほど美しいが、くせつ毛がひどく、手入れを面倒がる。

服装も、制服以外にスカートは持っていないくらいで、活動的な格好を好む。

美人というほどではないものの、いつも笑顔でいるため、不思議な魅力があり、人を惹き付ける少女だ。

明久とは距離感が近すぎるほど近く、前述したように双子と言っても過言ではない関係。その分互いを異性として認識していない節もあり、仲の良い姉弟のようでもある。

さすがに頻度は減ったが、同じ布団に二人で寝たり、綾香が明久に髪を梳いて貰ったりなどがいまだに行われている。

また、中学に上がったくらいまで一緒にお風呂に入った経験まである。

性格は明るく快活で、運動神経も抜群に良く、父親のサバイバル訓練の趣味に付き合わされた結果、同年代のアスリート並の体力と運動能力を誇るが、趣味の大半はインドア系。

楽しいことやお祭り騒ぎ、とくにイタズラを仕掛けることが好きで、仲の良い同性や明久にはセクハラまがいのイタズラを仕掛けることも多々ある。

しかしながら、心理的に男性との線引きは意外なほど厳しく、ボディタッチなどは無意識に避けてしまうようだ。その割には、女性としては無防備すぎるところがあるため、誤解を招くことが多々

ある。

このようにアンバランスな彼女ではあるが、それらがうまくかみ合った不思議な魅力を醸し出しているのも確かだ。

特に勉強しているわけではないが、学力は割と高く、学年で五十位前後。つまりAクラスとBクラスの狭間くらいの成績。本人曰く「授業を聞いてキチンと理解して、予習復習を忘れなければこの位は普通」らしい。

総合科目は2161点で、調子が良ければ2500点を超えることもある。

得意科目は数学と物理で、パズル感覚で黙々と数式を解いていくのを好む。

特に集中しているときの解答速度は群を抜いており、調子の良いときは、どちらでも500点前後とれる。

他の科目はだいたい150点ほどをコンスタントにとっけていて、苦手科目はない。

綾香の召喚獣は、ディフォルメされた綾香の容姿で、文月学園の冬の制服に、金細工の施された黒いガントレットとレガース、そして腰に下げた二本の柳葉刀を武器とする。

敵の攻撃は、ガントレットとレガースで受け止めたり弾いたり、受け流すスタイル。

武器の柳葉刀とは、先端の方が大きく分厚い中華刀で、その大きな剣先の生み出す遠心力で切断力を増す武器。これの二刀流で戦う。

また、柄頭から紐が伸び、先端が柳葉刀の鞭のように使える。この紐の長さも相当長いため、二本同時に振り回せば、召喚フィールド内のほとんどをカバーできる。

特殊能力は、『ミラージュステップ』。使用ごとに分身が一体生

み出され、本体の行動を追従する。この分身による攻撃も通常の攻撃と同じ扱いになる。

— 一体生成することにより、10点を消費する。

分身は、フィールドを出るか、攻撃を受けるかしない限り消えることはない。

だい いちもん (前書き)

なにやら思っていたよりずいぶんと反響がありましたので、
書きしてみましたよ？

読んでくださるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです

だい いちもん

校舎へと続く坂道。

両脇を桜で彩られたその道に、鮮やかな金色が踊る。

「疲れた〜、アッキーおんぶ〜」

「もう、しっかり走ってよ綾香」

少しネジの緩そうな少年に手を引かれ、金髪の少女がぶーたれる。

「だいたいバイク通学ダメなのが問題なんだよ〜。二ケツすれば遅刻なんてしなかったのに〜」

ぶつぶつ文句を言いながらも手を引く少年にならって走る。

おかげで癖っ毛の長くて柔らかそうな金髪と、文月学園指定のブレザーを内側から盛り上げるふくらみと、腰回りを覆うスカートが上下に揺れていた。

「どっちにしたって僕を抱き枕にして寝ちゃった時点でアウトだったと思うよ」

苦笑いする少年、吉井明久にうながされ、仕方無しに足を早める

少女、夏目綾香。

唇をとんがらかせながら明久の後頭部をにらみつける。

「むー、アッキーのくせに生意気な……とっつ」

つと楽しげなかけ声が響いて明久の背中に衝撃が走り、少女の柔らかな体がぶつかってきた。

「わわっ?!」

思わぬ衝撃に驚いて声を上げるも彼女の体をしっかと支えてみせる明久。彼の背中に笑顔でおぶさった綾香は身を起こしてご満悦だ。

「らつくち〜ん いっけー明久号〜」

元氣良く右手を突き出した彼女に対し、深々とため息を付いた明久は、彼女を支え直してから軽く走り出した。

どちらかといえば細身な明久だが、その体はきっちり鍛え上げら

れていた。

幼い頃から綾香と一緒に、サバイバル訓練が趣味だという彼女の父親の訓練に付き合わされた結果だ。

綾香はそんな明久の首に手を回し、彼の背中に体を預ける。

彼が坂道を上りきるまでの、わずかな間、綾香は桜を楽しむ。

明久が、足取りも息づかいも乱れぬまま坂を上りきると、そこには浅黒い肌の巖のごとき漢が仁王立ちしていた。

「遅刻だ。吉井に夏目」

「あ、鉄じ……じゃなくて、西村先生。お早うございます」

「あー てっちゃんだー おっはよ〜ん」

明久は軽く会釈し、綾香は明久におぶさったまま身体を目一杯伸ばしながら右手を大きく振った。

その様子にため息をつく西村教諭。

「はあ、おまえ達は……普通に『お早うございます』じゃないだろう。それから夏目。おまえは教師に対してフレンドリー過ぎだ」

「はあ、じゃあ……今日も肌が黒いですね？」

「だねー 今日もいい感じに暑苦しいぞ」

明久が首を傾げながら言う真上で、綾香が片目をつむってペロリと舌を出しながらサムズアップする。

「お前ら……遅刻の謝罪より俺の肌の色や暑苦しさ……の方が重要なのか？」

「あ！ そつちでしたか。すいません」

「あたし的には重要かな？」

謝る明久に、楽しげな綾香を見て嘆息する西村教諭。

「とにかく受け取れ」

そう言っただけで差し出してきたのは二枚の封筒。

それを綾香が受け取り、明久の背から飛び降りると、自分のものと一緒に彼宛の封筒もさっさと破り開ける。

「って?! ちょ!?! ま?!?!」

流れるような彼女の行動に、焦る明久。

「アッキーのクラスはつと……へえ……ほお……ふうん」

明久に見せないように中身を見てにんまり笑う綾香。

「ちよつと返してよ！」

「やっだよん」

明久は自分のクラスが書かれた紙を綾香から取り返そうと掴みかかるが、彼女は楽しそうに逃げ回る。

それが少し続いたところで……。

重いものが石に落とされたような重量感あふれる音がふたつ響く。

西村教諭の拳が二人の頭を痛打した音だ。

「まったくいい加減にせんか。とつと自分の教室に行け」

呆れたような声を出す西村。その足下で頭を押さえてうずくまる二人。

そして、綾香が痛みのおまり取り落とした紙には……。

『吉井明久…… Fクラス』

『夏目綾香…… Fクラス』

ふたりの学園最低クラスでの生活が始まった。

だい いちもん (後書き)

いかがでしたか？

普段書いてる分量より短い感じですが、テンポ良く行きたいなと思っております

だいにもん？（前書き）

さて、『だいにもん？』更新となります
読んでくださる方に楽しんでいただければ幸いです

だいにもん？

「おー　でつかい教室だー」

「……うん。ばかデカい教室だね」

去年は足を踏み入れなかった三階。

そこで目の当たりにしたのは巨大な教室だ。

「おー　すっげーぞアツキー！　個人エアコンや冷蔵庫までついでる！」

「なんかもう高級ホテルだね……」

目をキラキラさせてる綾香に対し、明久はちょっと引いてる感じだ。

「あ！　優子だ　　おーい　　ゆーこー」

豪華な教室の廊下側の窓から中を覗いていた綾香は知り合いを見つけた喜びに、体をいっぱいに伸ばして両手を振る。

それに気づいた眼鏡にボブカットの少女は不思議そうな顔になり、ポーンとシュートヘアの緑髪の少女は面白そうな表情となる。

そして綾香の目当ての少女は、彼女を一瞥して、無視した。

「あつれー？　気づかないのかなー？」

目当ての少女の様子に綾香は首を傾げる。

「……なんか注目されてるね綾香」

「ん？　別にいいじゃん？　はあ。じゃ、教室行こうか」

言うが早いか明久の手を取り歩き始める。

そんな二人を鋭く見つめる二対の視線に気づかずに。

三階、旧校舎部。明久と綾香は連れだってその古ぼけた……いやさ廃屋のような教室の前に立った。

「すつげー。きつとこの教室崩れるぞ？ アツキー」

先ほど同様、目を輝かせる綾香。対して明久は顔をひきつらせるばかりだ。

「ま、まあ中はマシかもしれないしね」

おのれに言い聞かせるようにつぶやく明久。

「なあなあアツキー　どんな奴がいるんだろうな」

言いながら綾香は明久を引っ張りながら戸を開けた。

「早く座れウジ虫野……ぼぐればぐらしゃっ?!」

開口一番罵倒を口にした赤い髪をツンツンに立てた少年の顔面に、きれいに揃えられた白い両足が突き刺さり、吹き飛ばされる。

綾香がショートダツシュからひねりを加えたドロップキックを決めたのだ。

ちなみにスカートを太股で挟んでめくれないようにしているが、瞬時にベストポジションを確保した小柄な少年がシャッターを切っていた。

が。

着地した綾香がにんまり笑う。

「……………ま、まさか?!」

「そうだよ？ 康太。あたしはちゃんとスパッツ履いてるから」

ぴらりとスカートをめくって見せる綾香に鼻血を噴出する小柄な少年。

「……………くつ。スパッツを履いていながらもあたかも履いていないようにガードして見せるとは……不覚……………」

そのまま力尽きる、康太と呼ばれた少年。

一方、明久は綾香のロケットキックを食らった赤毛の少年のところに近づくと、足先で彼をつついた。

「おーい、雄二？　生きてるか?」

「ぐ……………あ、明久か……………いたい何が……………」

頭を振りながら身を起こした、雄二と呼ばれる少年。

その顔面には、しっかりと綾香の上靴の底の模様が刻まれている。

「綾香の全力ロケットキックを食らったんだよ。あれ、地味にひねりまで加えてるから威力あるんだよね」

「……綾香？ アイツはBクラスかAクラスだろ？ なんでFにいるんだ？」

頭がはつきりしてきた雄二は、クラスに思いもしない人間がいたことに驚く。

「あー、うん。綾香、途中退席したからね。点数が無いんだよ」

雄二の質問に顔をしかめながら答える明久。

「あー面白かった。あれ？ 雄二じゃん。どつたの」

向こうで康太をイジって遊んでいた綾香がやってきてそのたまう。

「てめえに蹴り飛ばされたんだよ！ このエセ外人！」

「あー。さっきの雄二だったんだ。ウジ虫呼ばわりされたから反射的に蹴ったんだけど、雄二ならいつか」

花が咲くように笑う綾香。そのまま明久の腕をとって歩き出す。

「アッキー、こっちで一緒に座ろうぜ」

周囲から明久に向けられる殺気と嫉妬の視線を気にもせず、明久と腕を組むようにしながら教室の後ろの方へ引っ張っていく。

畳敷きにちゃぶ台という、本来教室としてあり得ない環境も気にしない綾香。

果たして彼女はこのおんぼろ教室で、どんな騒動を引き起こすのか？

だいにもん？（後書き）

いかがでしたか？

基本自由な綾香の活躍は、まだまだこれからですよ

だい さんもん！(前書き)

だい さんもん！ 更新しました
よろしくお願ひします

だい　さんもん！

周りの目を気にすることなく空いてるちゃぶ台へ向かった綾香と明久。

「おー　ここにしょーぜー」

隅の空いてる席を発見した綾香が楽しそうにそちらへ向かう。そして苦笑い気味にその後を着いていく明久。

着席しながら手招きする綾香。

「アッキーは、あたしの後ろな」

言われて明久はうなずき、綾香の後ろの席に着く。

するとちょうど担任とおぼしき中年男性が教室に入ってきた。

未だダメージの抜けきらない雄二と康太に対して席に着くよう促すと、自己紹介を始めた。

「つー、まだ頭がくらくらするぜ……」

ぶつぶつ言いながら明久から一つ席を挟んだ向こうに座る雄二。

その目は綾香をにらんでいるが、彼女は気にしない。

と、明久の眼前に金髪が広がった。綾香が頭を背中に向けてそらすように明久の方へ顔を向けたからだ。

「なあなあアッキー。なんで黒板に名前書くのやめたんだろっな？」

綾香に言われて前を見ると、福原慎と自己紹介した中年男性が黒板の方から生徒の方へ向き直ったところだった。

「あー、さつき見たんだが、チヨークのクスしか無かったからな」

つまらなさそうに答える雄二。それを聞いて綾香は目を丸くした。「すげーな！……たはあ〜」

無理な姿勢で耐えていた彼女だったが、力尽きて明久のちゃぶ台に背中をつけた。

ちなみに先ほどから自己主張の激しい双子山が際立っていて、男子の視線がそこへ集束しており、康太がシャッターを切っていた。

「それでは、順番に自己紹介してもらいましょう」

福原教諭の声に、綾香はパツと身を起こした。目をキラキラと輝かせて聞く体勢だ。

そして、ひとり立ち上がった。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

独特の言葉遣いに小柄な体。美少女と見間違っばかりの愛らしい容姿の少年、木下秀吉。

明久の去年のクラスメイトだ。

「おー 秀吉じゃん 相変わらずかわいいーよなー」

そう綾香が口になると、秀吉が綾香の視線に気づき、一瞬、複雑そうな表情になったがすぐに座ってしまった。

そして再開される自己紹介。

「……………土屋康太」

康太が立ち上がって名乗ると、綾香が“あの”悪魔の笑みを浮かべた。

康太が座ろうとしたところで綾香がおっきな声を出す。

「いよっ ムツツリスケベ」

「……………そんな事実はない(ブンブンブン)」

顔と手を左右に振って否定する康太。

クラス中に注目されながら否定を続ける彼を見て、綾香は大笑いする。

その騒ぎが終息し、再開された自己紹介。

「島田美波です。海外育ちで、日本語の会話は出来るけど、読み書きは苦手です。あ、でも英語も苦手です。ドイツで育ったので。趣味は……………」

そして今自己紹介をしている赤茶色の髪をポニーテールにした少女を見て、またもや綾香が笑う。

「まあた美波と同じクラスじゃんアッキー 嬉しいんじゃない？」

「そりゃ友達だしね……………。けど彼女。段々と技の切れ味が上がってきてるから、避けるの大変なんだよね……………」

すこしげんなりしながら答える明久。

「はるはる」

手を振る美波に、綾香も笑いながら手を振り返していた。

「やっは」 美波

さらに自己紹介は続いて、綾香が立ち上がった。

「夏目綾香だよ よろしくね 好きなものはプリン 嫌いなものはしつこい人。身長は170。体重はないしょ スリーサイズは上からバスト92、ウエスト63、ヒップ93だよ ちなみに恋愛とかメンドいから彼氏の募集はしてないよん」
その言葉に、Fクラス男子の大半が絶望した。

だい さんもん！（後書き）

だい さんもん！ いかがでしたか？

綾香の恋愛メンドい発言に、全Fクラス男子が泣いた！

次回は綾香が何を始めるんでしょうか？

だい よんもん

綾香がFクラス男子を絶望のずんどこに追いやったのを後目に、
明久が立ち上がる。

「えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さい
……」

シンッ……。

誰も明久の自己紹介なぞ聞いていなかった。

「ノ……ノリアクシオンって、地味にダメーヂデカいよね……」
さめざめと涙を流しながら着席する明久。

すると綾香が楽しそうに振り向いて、明久のちゃぶ台に、笑顔で
頬杖を着く。

「気にすんな ダーリン」

「……やっぱ痛々しいからその呼び方やめて……」
明久の涙が加速するのを見て、綾香はさらに楽しげになった。そ
して膨らむ殺意と嫉妬。「……気のせいかわ僕へのプレッシャーが凄
いことになってる気がするんですけど……っ?!」

「? そうかあ?」

あまりの圧力に滝のような汗を流す明久。それを受けて綾香が周
りを見回すと、プレッシャーが霧散する。

「なんともないじゃんよ」

言いながら明久に笑顔を向ける綾香。

と、そのとき。

教室の戸が開いて、一人の少女が息を切らせながら入ってきた。

「あの、遅れて、すみません……」

「え？」

その少女の姿に、教室中が呆気にとられた。

そして綾香も驚いた顔で立ち上がった。

「み、瑞希?!」

「え? あ、綾香ちゃんですか?! な、なんで綾香ちゃんがつ?!!」

「それはこっちの台詞だよ」

そう言いながら立ち上がると、瑞希の方へ行って彼女を抱きしめる綾香。

「わたしは振り分け試験中に熱を出しちゃって……。それで綾香ちゃんは?」

綾香に抱きつかれながらふわふわのピンクブロンドの少女、姫路瑞希は苦笑い気味に答えてから綾香に訊ねる。

綾香は瑞希の言葉を聞いて、大変だったねとつぶやくように言うてから、相手を崩した。

「あたしは、祖父ちゃんが倒れたって連絡が来てさ、途中退席したんだよ。まあ、実は祖父ちゃんのイタズラだったんだけどね」

その後、祖母ちゃんやパパ達に怒られてたよ〜などと笑いながら話す綾香。

「けど、今年はアッキーも瑞希も同じクラスだなんて、あたし嬉しいよ」

「え? 明久君も居るんですか?」

綾香の言葉に、瑞希が顔をほころばせた。

あっちだよ。と、綾香が指さした方を見て花が咲き乱れるかと思うほどの笑顔を浮かべる瑞希。

これによって明久への殺意と嫉妬はうなぎ登りに上がっていく。そんな空気など読まぬとばかりに中年男性の弱々しい声を通った。

「え〜、嬉しいのはわかりましたが、席について下さい夏目さん。

それから姫路さんは自己紹介を」

言われて綾香は目をぱちくりさせる。

それから腰を折って頭を下げた。

「あーゴメンね？ 福ちゃん。席戻るから怒らないでね？」

そう言ってから席へと戻っていく綾香。

そして、残った瑞希が軽く会釈した。

「姫路瑞希です。一年間、よろしくお願ひしますね？」

そう言って顔を上げると、少し頬を紅潮させながら小走りで教室の後ろの方へ向かった。

「ふう、緊張しました〜」

ほう。と息をついて、明久と雄二の間の席へと着席する瑞希。

それを待ちかまえていたように綾香が瑞希の方へ体を向けた。

「けど、瑞希と同じクラスになるのって小学校以来だよ〜」

そう綾香が話すと、瑞希も笑顔で応じる。

「そうですね。中学は違うところでしたし」

「去年なんか、アッキーともクラス違っちゃったしさ。小中で違うクラスになったこと無かったのに……」

そう言っただけしんなりとなる綾香。

するとその時のことを思い出したのか、明久が苦笑いを浮かべた。

「あの後ひどかったつけ。『何で違うクラスなんだー！』って怒鳴られたんだよ？ 僕のせいじゃないのに」

やれやれと肩をすくめる明久に、綾香はバツが悪そうになる。

「う。い、いいじゃんさーその事は！」

「クスクス、私の所にも相談しにきたくらいですしね」

「み、瑞希っ？！ バラすなんて裏切り者おっ！！」

などと騒ぎになり始める。

すると当然。

「はい、その人達。静かにして下さい」

と、教卓を軽くたたきながら注意する福原教諭。

それに対して明久達が謝ろうとした瞬間。

パキィ、ガラガラガラ……。

そんな音を立てて、教卓が廃材の山になった。

だい ごもんかな？

福原教諭が廃材となった教卓の換えを取りに行っている間、明久は雄二を誘って廊下に出ていた。

「戦争だと？」

「そう、試験召喚戦争」

訝しげに聞き返す雄二に対して、明久はしつかりうなずいてみせる。

「……おい明久、てめえなにを企んでやがる？」

「別に企んでなんていないよ。あんまりにも教室が酷いからね」
探るような雄二に対して、軽く肩をすくめる明久。

その様子を見ていた雄二の目が細く鋭くなる。

「……姫路と夏目だな？」

「!?!」

雄二の指摘に、体が震える明久。

「……やっぱり、わかるかな？」

「カマかけたただだったの」

「うづく」

「まあ、いいだろ。Aクラスとの勝負に勝つ策もなんとかかなりそうだしな。と、戻ってきたみたいだ。中へ入るぞ」

雄二に言われて明久はうなずきながら教室に入ってしまった。

福原教諭が戻ってきてから再開される自己紹介ではあったが、淡々と進むそれに飽きた綾香は、明久のちゃぶ台に寝そべり、組んだ両手に顎を乗せながらあくびをかみ殺していた。

綾香の頭は明久の顔の下あたりにあり、彼のちゃぶ台は美しい金糸のテーブルクロスが敷かれているようだった。

「つまんねーなー？ アッキー。そっから紐無しバンジーしてきなよ」
笑ったげるから」

頭を横に倒し、横目で明久を見上げながら小悪魔の笑みを浮かべる綾香。

その突拍子もない提案に、明久はため息をつく。

「笑ったげるから　じゃないでしょ？　ここは三階だからね？　紐無しバンジーなんてしたら怪我しちゃうからね？」

「ちえー、つまんなーい」

唇をとんがらかせ、頬を膨らませながらぶーたれる綾香。白い足がパタパタと動き、赤いスカートと黒いスパッツに包まれた丸いヒップが揺れる。

この綾香の体勢に、明久への殺意と嫉妬を向けたいFクラス男子であったが、そんなことより、無防備な綾香をガン見したいという欲望がせめぎ合っているようだった。

そして血涙を流しているのは綾香と同じ列に座る男子諸君。

真後ろを向かなければその絶景を見ることができない為、激しい葛藤に身を焦がしていた。

「さて、グダグダではありませんが、自己紹介最後の一人は君ですね？　坂本君」

誰も聞いていない自己紹介はいつの間にもやら終盤だったようだ。

福原教諭に言われた雄二が、うーっす。と、答えながら立ち上がり、教壇へと向かう。

その様子になにか感じるものでもあったのか、綾香も身を起こして座り直した。

雄二が教壇まで来ると、福原教諭が声をかけながら教卓を譲った。

「坂本君は、Fクラスのクラス代表でしたね」

「はい」

返事をしながら教卓に手を着きながら立った。

「俺がFクラスの代表、坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」

そう言って少し間を置く。

自然、クラス中の視線と意識が雄二に集中した。

それを確認した雄二はおもむろに口を開いた。
「さて、ここでひとつ、みなに問いただしたいことがある」
そう言っ言葉を切り、教室を見回す。
その視線の先を追ってしまっ一同。

古ぼけてガタガタなちゃぶ台。

つぎはぎだらけで、綿の代わりにホコリが詰まっっいそんな座布
寸。

隙間だらけの壁と、割れたガラスしかはまっっいていない窓。

それらを見てから、皆に向き直る雄二。

「…… Aクラスは、システムデスクにリクライニングシートらしい
が…… 不満はないか？」

「大アリじゃあああっっ！！」

クラスの男子が一斉に唱和した。

そしてそこかしこから、不平不満の声が、止めどなくあふれでる。
「そうだろう？ 俺も代表として問題だと思っっている。そこでだ」

雄二の雰囲気、カミソリのごとく鋭くなっった。

「我々Fクラスは、Aクラスに対し、試験召喚戦争を挑もっと思っっ
引かれた引き金。」

そして、その言葉に、綾香の目が になっった。

だい ろつくも〜ん

『勝てるわけがない!』

雄二の引いた引き金に対する第一声。そしてこれこそが、クラスの総意を代弁していた。

試験召喚戦争とは、文月学園独自のシステム、“試験召喚システム”を利用し、テストの点数に応じた強さの召喚獣を召喚し戦わせて行く疑似戦争だ。

これに勝てば、相手の教室設備を奪うことが出来るのだ。

しかし、文月学園は、第二学年からは成績順にクラス分けがなされる。最底辺のFクラスと最高位のAクラスでは、三倍以上の点差があり、それがそのままクラスの戦力差につながるのだ。

いくら最底辺のクラスとはいえ、その位のことわからないような人間はおらず、さらにあちらこちらから開戦に対する否定的な意見が飛び出し始めた。

その中であつてなお、明久は真剣な眼差しで、綾香は楽しげな顔で、雄二を見つめていた。

そして、クラス中が騒ぐ中、それを貫く声が響いた。

『いや、勝てる!!! 俺が勝たせてみせる』
力強い言葉。

それを発したのは雄二だ。

呑まれるように、クラスが静かになる。

「だが、そうは言ってもにわかには信じられないだろう。そこで、このクラスに存在する勝てる要素を説明しようと思う」

雄二の言葉に、クラス中が顔を見合わせ、ざわつく。

しかし、彼は意にも介さずに口を開いた。

「まずは康太。姫路のスカートを覗いていないで前に来い」

その雄二の言葉に、瑞希が、え? となり、畳に顔をつけていた康太があわてて起きあがる。

「……………！？（ブンブンブン）」

「ひゃわっ?!」

赤くなり、太股を閉めながらスカートを押さえる瑞希。

その様子に綾香は楽しそうに笑う。

「あっはっはっは 康太のムッツリスケベ」

「…………… そんな事実はない」

はつきり否定する康太。その視線が、綾香の視線と絡み合う……

ことも無く、彼女のわがままな双子山に注がれていく。

ふいに、綾香が口を開いた。

「…………… 何色だった？」

「…………… 水色」

「やっぱ見てんじゃん」

「…………… 巧妙な誘導尋問」

「ひどいです綾香ちゃん！ 何で私のパンツの色を公開しちゃうんですか?!」

パンツの色を暴露されて目をぐるぐるにしながら憤る瑞希。

「ぱんつくらい良いじゃん 特に何も減らないし」

「減ります！ 何かこう、大切なものが減っちゃうんです！」

バラしたのは綾香ではないが、瑞希は混乱していて気づかない。

一方の綾香も気にした風でもなく瑞希に応じている。

「あー。話つづけたいんだが……………」

不意に雄二から声をかけられ、瑞希はハツとなり、顔の紅の面積

と色合いを増加させながらぺこぺこ謝った。

「…………… ま、いい。少し脱線したがこいつは土屋康太。まあ、この名

前ではあまり知られてないだろうが、こいつの正体はあの“有名な

寡黙なる性識者”だ」

「……………」

雄二のその紹介に、教室が騒然となる。集まる視線は畏怖と畏敬。

「よ ムッツリスケベ」

さらには綾香が合いの手まで入れて教室は大盛り上がりだ。

しかし当の康太はそれどころではない。

「……………！！（ブンブン）」

こんな状況にあつてなお否定する康太。その姿は哀れを誘う。

「はあ、煽るな夏目。次は姫路。今更説明する必要はないだろうが、その力はみんなも知つての通りだ」

「わ、私ですかっ？」

「うちの主戦力だ。期待させて貰う」

言われて瑞希は神妙な顔つきで、ハイ。と返事をする。

「それから島田美波」

「ウチ？」

突然話を振られて驚く美波。

「こいつは自己紹介にあつたように帰国子女で、数学ならBクラスレベルだ」

その雄二の言葉に、どよめきが生まれる。

「ちょ、ちよつと坂本！ ウチはそんな戦力には……………」

美波は持ち上げられて、若干焦り気味に否定しようとするものの。

「木下秀吉だつて居る」

雄二はスルー。

「ワシかの？」

名前を呼ばれると思つていなかった秀吉は、きよとんとなる。

だが、教室は秀吉の名前が拳がったことにさらなる盛り上がりを見せる。

「そして夏目綾香」

「いえーっす」

続けて拳がった自分の名前に、綾香は立ち上がりながら応え、スキップするように前へ出ると、そのまま教卓に飛び乗った。

「お、おい！？」

これには雄二も驚いてやめさせようとするが、綾香は気にしない。

「綾香だよー みんな、勝つぞーっ！」

そう大きな声で宣言し、大きく両手を振り回しながら軽く飛び跳ねる。

するとFクラスの士気は最高潮を迎えた。

『ウオオオオーツツ!!』

そんな雄叫びが響き、教室が揺れる。

そして綾香の足が、再び教卓に着いた瞬間。

バキバキバキツ!!

「へ？」

「な？　ぐおっ?!」

崩壊する教卓に雄二を巻き込みながら教壇へと落ちる綾香。

埃が煙のように舞い上がり、二人の姿を覆い隠す。

「綾香っ!?!」

「綾香ちゃんっ!?!」

明久や瑞希をはじめとしたクラスメイトたちが、あわてて教壇に集まった。

次第に晴れたそこには、元教卓の廃材の山。そして、クラス代表の少年の顔の上にぺたんとな女の子座りした綾香の姿があった。

だい ななもんだッゼ!

「うへえ……ぺっぺっ、ホコリまみれだよ」

頭からホコリを被ってしまった綾香は、それを払う。

「もがあ〜!!」

「きゃんっ?!」

すると突然尻の下から声が響き、その刺激に驚く綾香。

「もめえっ!! まあくおえっ!! (重えっ!! 早く退けっ!!)」

「

「ひゃあんっっ?!」

立て続けに刺激を受けて少し艶っぽい悲鳴を上げながら飛び退く

綾香。

「くっそ、ひでえ目にあつた……」

綾香の尻の下から現れたのは、赤毛の少年の顔。

ホコリと廃材まみれのまま身を起こした彼は、周囲の空気の変化

に気づかない。

「……おい、夏目! ふざけるのもいい加減に……?」

激昂した様子で綾香に怒鳴り始めた雄二は、そこで初めて教室の空気がドス黒いことに気づいた。

よく見れば明久の背後に隠れるようにしている綾香は珍しく涙目で、瑞希に慰められている。

「お、おい? なんだお前ら? 何殺気立ってるんだ? 俺はどっ

ちかと言えば被害者……」

焦りを滲ませ弁解する雄二。

その時、綾香が口を開いた。

「ぐす……。アッキー、雄二にえらい事されたー」

その一言で、クラス男子が臨界点を迎えた。

『坂本を殺せーっ！っ！』

「俺が何をしたーっ?!」

跳ね起きながらダツシユする雄二。それを追尾するFクラス男子生徒たち。

それを見送る明久と綾香、そして、瑞希に美波。

皆の姿が見えなくなったところで、明久にしがみつくようなかっこの綾香の口が悪魔のように笑う。

「ざまみるバカ雄二」

先ほどのしおらしい態度はどこへやら。小憎らしいほどのいい笑顔になる綾香。

それを見て、美波と瑞希は軽く嘆息する。

「やっぱりね」

「ダメですよ？ 綾香ちゃん。あれじゃ坂本君が気の毒ですよ？」

苦笑いを浮かべる美波と、軽く諭そうとする瑞希。それに対してぶーぶー文句を垂れる綾香。

不意に、明久の肩をつかんで強ばっていた綾香の手が優しく包まれた。

明久がそつと彼女の手に自分の手を重ねたのだ。

それだけで、綾香の体の奥が落ち着きを取り戻していった。

そんな四人を見つめる一対の目。その目は綾香に強い意志をぶつけるかのように細まる。

長い黒髪を翻し、立ち去る影。

そのまなざしが意味するものは……。

少し経って。

その教室には奇妙な集団が集まっていた。

上方に向かって尖った黒い被りものとこれまた黒いマント。手には大鎌を携え、衣装には『F』の文字がワンポイントで入っていた。

そんな装束の“怪人”が数十名集っているのだ。

そしてその中央には、猿ぐつわをかまされたうえに縛られて転がされている雄二の姿。

『諸君。ここはどこだ？』

『『最後の審判を下す法廷だ！』』

『異端者には？』

『『『死の鉄槌を！』』』

『男とは？』

『『『愛を捨て、哀に生きるもの！』』』

『宜しい。これより……2・F異端審問会を開催する！』

もはやそこはサバトの会場だった。

裁判か何かのように罪状が読み上げられ、糞虫のような雄二の罪が読み上げられていく。

むろん雄二は反論しようとするが、猿ぐつわまで咬まされ、罪を認める台詞をねつ造されていた。

その様子を明久と美波は、とても残念なものを見る目で眺め、瑞希は苦笑いを浮かべている。どうやら冗談だと思っただらしい。

一方で綾香は……。

「アハハハハ、アツハハハハハハハハハハ」
腹を抱えて笑っていた。

だい はちもん……かな？

廃屋のような教室内に十字架が打ち立てられ、そこに雄二が掛けられる。

すでに灯油とライターまで用意されたあたりで、雄二の顔がひきつった。

一方、そんな雄二を見て笑い転げていた綾香もそろそろ落ち着き始めていた。

「あー笑った笑った。あ、でもさアツキー」

と、彼女の隣に立つ明久へと顔を向ける。

それに彼が応じると、綾香は花が咲くように笑いながらこう言い放った。

「あいつら、すっげえおもしろかったけど、正直“キモイ”な」その言葉に異端審問会の面々の動きがピタリと止まる。

「なんだろーな？あんな“キモイ”ことしてたら、女の子に避けられるよなー？」

しみじみつぶやかれた言葉に白くなり、ピシリとヒビが入った。

「あたしだったら絶対近づきたくないなあ」

全員、砕け散って灰になった。

その様子を見た綾香は、彼らを指差しながら腹を抱えて笑う。

そんな綾香を見て、明久は苦笑いを浮かべると口を開いた。

「騒動の発端は綾香じゃないか。そんなこと言っちゃ……別にな構わないか」

綾香を注意しようとした明久だったが、ハツとなって顎に手を当てると意見を翻す。

その言葉に綾香は我が意を得たりとばかり笑顔になる。

「でしょでしょ?!」

おおげさにはしゃぐ綾香を見て、明久は柔らかく笑った。

つられて美波と瑞希も仕方ないとばかりに苦笑いを浮かべる。

「……………」

そんな彼女らをファインダーに収めていた康太は、微妙な違和感に首を傾げていた。

不意にフレームインした明久が彼の方を見て、人差し指を口に当ててみせる。

そこで気づいた。

綾香の表情がわずかに硬いことに。

これには康太も驚いた。こと、女子が絡むことならば細やかな機微に至るまで気づける彼が、ほとんど気づかないような違和感を、明久がすでに感じ取っていたことに。

だからこそ、明久は綾香の近くで一緒に笑っているのだということ。

「……………」

小さく笑い、デジカメを仕舞う康太。

どうせ撮るなら、その女子の最高の顔を撮る。

それが康太のやり方だった。

福原教諭が廃材を片づけ、新たな教卓をやっとこさ発見して戻ってきたことにより、騒動は終息を見せた。

それ以前にFクラスの大半が屍になっているわけだが。

そして珍しく怒った感じの福原教諭に注意された綾香が、ちょっとしよげたのは完全に余談だ。

「くっそ、ひでえ目に遭ったぜ……………」

ボロボロの雄二が肩で息をしながらつぶやくと周りを見回した。

広がるのは死屍類々としたクラスメイト達。

彼らが一応復活するのを見計らって先ほどの話を続ける。

「はあ、グダグダになっちまったが……………。あー、どこまで話したん

だったかな？ とにかく！ 俺たちなら勝てる！！ そのための方策も、“ここ”にある！！」

自分の頭を指しながら力強く言う雄二。

「みんな、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

「ならば戦争だ！！ 全員筆を執れ！ 出陣の準備だ！」

『おおーっ！！』

「俺たちに必要なのはちゃぶ台じゃない！ Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーっ！！』

「おーー」

一度鎮火しかかった炎が、今再び燃え上がった。綾香もノリノリである。

「よし。まずは俺たちの力の証明として、Dクラスを落とす。明久！」

「ん？ なんだよ雄二」

「お前が宣戦布告の使者だ。大任だが、お前にしか任せられないと思ってる」

威厳たつぷりに言う雄二。しかし、当の明久の反応は薄い。

「…………… 下位勢力の使者って、たいていひどい目に遭うよね」

「バカを言うな。大事な使者にそんな事をする訳がないだろう？ 騙されたと思っ行ってみる。大丈夫だから」

まじめな顔で返す明久に、雄二も真剣な顔で応じる。

その表情を見て、明久は軽く息を吐いた。

「仕方ないか。じゃあちよっど行ってくるよ」

言いながら立ち上がる明久。

それを綾香が見送る。

「おー がんばれよーアッキー」

その口元に、悪魔のような笑みを浮かべながら。

ちなみに、秀吉は未だに灰化から復活出来ていなかった。

顔をひきつらせてつぶやく明久。

次の瞬間、背筋に寒いモノを感じて避けると、明久の首元を何か
が通過した。

それは制服の黒い袖だ。

その先に伸びる白い手には、文月学園指定のネクタイ。

あの一瞬で抜き取ったらしい。

見ればその手の主は、復活した美紀だった。

「さあ、天使ちゃん！！ お着替えしましょう！」

「豚野郎！ 死になさい！」

美紀が明久に迫り、美春の手からはいくつもの文房具が投げ放た
れる。

「くっ?!」

軽くバックステップしながら、すばやく上着を脱いで左腕にもち
飛翔してくる文房具をなぎ払う。

そして右から伸びてくる美紀の手を、右手一本で弾いていく明久。
その間にもどこに隠していたのか大量の文房具を投擲する美春。

二人の猛攻に、防戦一方になる明久。

そんな彼らを見つめるDクラスの面々と、戸口から覗いてくる蒼
い瞳とポリウムが有りすぎて隠しきれない金色の癖っ毛。

綾香だ。

教室をこっそり抜け出し、明久の様子を見に来たらしい。

その口元には、あの、小悪魔のような笑み。

どうやら明久の窮地を楽しみに来たらしい。

ピンチの明久。

それを楽しげに眺める綾香。

はたして宣戦布告は出来るのだろうか？

だい　じゅもんだよ

Dクラスにて、二匹のケモノ相手に苦戦する明久。

その視界の端に、ポリユームのある金色がかすめる。

一瞬そちらに視線を向けて確認すれば、それが綾香の金髪だとす
ぐにわかった。

そして、口元にはあの笑み。

「つて綾香あつ！　おまえ知ってたなっ！？」

攻撃を捌き続けながら声を上げる明久。

すると綾香が笑みを深くする。

しかし、明久にはそれを確認する余裕もない。

たまりかねて声を上げてしまう。

「くっ？！　見てないで手伝ってよっ！！　綾香っ！！」

「えー。どうしよっかなあ」

必死な明久に対し、値踏みをするように返す綾香。

その様子に、明久は渋面を作る。

次第に追いつめられはじめる明久。

「ぐっ！？　くくっ？！　じよ、条件はっ！？」

苦し紛れに叫ぶ。と同時に綾香の蒼い瞳が輝いた。

「今日のお昼はアッキー持ち、夕食当番も交代ね？　後帰ったらマ
ッサージね」

「ふっかけすぎだろっ？！」

綾香の出した条件に、思わず突っ込む明久。

すると綾香は大げさに肩をすくめた。

「ああ、残念だな。従弟が女装趣味に走ったあげく、グロテスク
に殺されるなんて……。いやー残念残念」

そう言って見せつけるようにきびすを返して立ち去ろうとする綾
香。それを感じて明久はあわてた。

「ま、待ったあーっ!!」

思わず叫ぶ明久。その横を文房具がすっ飛んでいき、綾香が足を止めた。

「飲む!! さっきの条件飲むからっ!! 助けて綾香あっ!!」

徐々に追いつめられ、半泣きになりながら承諾する明久。

しかし。

「えー。でもさっき断られたしな」

言いながら渋り、横目で明久を窺う。

いよいよ進退窮まり始めた明久はマシンガンのように繰り出される美紀の手を片手で払い続ける。

「……帰りにプリン買ってあげるからっ!!」

飛来する文房具から飛び退き、もはや後が無いとばかりに叫ぶ明久。綾香の足が止まり、勝ち誇ったかのような顔になる。

「二個ね」

「わ、わかったあっ!!」 嬉しそうに言う綾香に、明久はやけくそ気味に答えた。

次の瞬間、美紀の目の前に金色の影が踊り込む。

「! あ、綾香ちゃん?!」

「また邪魔をするのですかっ?! 夏目綾香!!」

その影に、見覚えのある蒼い瞳を認めて驚く美紀と美春。

「交渉成立」

言いながら美紀の前に立ちはだかる綾香。それを見て美紀は綾香に手を伸ばす。

「なら! 天使ちゃんの前に綾香ちゃんにお着替えを!」

「ごめん美紀ちゃん、あたしは“それ”パスだわ」

美紀に苦笑いしながら答えた綾香は、伸びてくる手をすべてパリングしていく。

美紀と綾香の腕が見えなくなるほどの速度で繰り出され、手を打ち合わせる音が、マシンガンを撃つかのように響き渡る。

が、終わりは唐突にやってきた。

「きゃっ?!」

美紀の可愛らしい悲鳴とともに彼女の両腕が上に向かって万歳するようになり上げられた。

綾香が美紀の手を捌くときに、角度とタイミングを調整して上に弾いたのだ。

そのまま美紀の右脇を抜けるように左足を踏み出し、右腕を横へ軽く出しながら、二の腕を相手の鎖骨に当て、右足で美紀の両足を刈る。

刹那、綺麗に宙を舞う美紀。

「にゃ~~~~っ?!」

悲鳴を上げ一回転しながら落ちる彼女の首根っこをひつつかんで床に叩きつけられるのを防ぐ綾香。

「おっとつと。危ない危ない。で、アッキーは」

目を回した美紀をその場に横たえ、長い付き合いの従弟へ信頼しきつた目を向ける。

その彼女の視線の先で、大きく振り回した制服の上着を目くらましにして美春の背後に回り込み、その首筋に手刀を落とす明久の姿があった。

だい　じゅういちもんかもね

「な、なんかなつたあ……」

大きく息を吐きながらつぶやく明久。もはや天敵と呼ぶに等しい二人だが、やはり女子を殴ったりはしたくない。

かといって手加減しながら二人同時に無力化するのは難しかったのだ。

「お疲れ」

と、ポリユームのある金色の癖っ毛を揺らし、蒼い瞳の少女が明久の元へ歩み寄りながら片手をあげる。

「うい~~~~」

疲れた声を出しながら明久も片手を上げ、二人で打ち合わせた。

「って！　綾香あの子たちがDクラスだって知ってたな！」

声を上げた明久を見て、綾香が軽く驚く。

「あ、覚えてた。いや、美紀からメールが来ててさ、それに美春も居る旨が書かれてたんだよね。アッキーが面白……マズい事になると思ってた野次馬……心配で見に来たんだよ。いやあ、無事で良かった良かった」

顔に憂いの表情を浮かべながらそう言う綾香を見て、明久はジト目になる。

「本音がだだ漏れてるよね？　それ」

指摘され、不　家のぺ　ちゃん顔になる綾香。

それを見た明久は、深く深く嘆息する。

「あ、あのー……」

不意に声をかけられ、顔を上げると、Dクラス代表の平賀が所在なさげに佇んでいた。

「俺に用事って……？」

平賀の言葉に、明久がアツとなり、綾香もそちらを見る。

「あー、あの二人のことで、すっかり忘れてたよ……」

「まだ言っただけだったの？」

肩を落としてつぶやく明久に綾香があきれたように言う。

「言う前に襲われたんだよ……。だいたい綾香が事前に教えてくれれば……」

「うまく対処できたって？」

「いや、何としてでも雄二に押しつけた」

それを聞いて、綾香が快活に笑う。

だが、Dクラスの面々の困惑は深まるばかりだ。

「和んでるところ悪いんだが、早くしてくれないかな？ 俺も暇じゃないんだ」

焦れたように声をかける平賀。言われた明久は愛想笑いを浮かべながら、ゴメンゴメンと返す。

「えーと、改めてFクラスの吉井明久です。僕たちFクラスは、Dクラスに対して宣戦布告します」

「……え？ 宣戦布告？ Fが？ Dクラスの俺たちに？」

さらりと言われた宣戦布告に呆気にとられる平賀。

「開戦は午後一ってことで じゃ、戻ろっアッキー」

その隙に明久の言葉を綾香が引き継ぎ、彼の腕をとってさっさと退室していく。

後には今起きていた騒動と、宣戦布告されたことに困惑するDクラス一同が残された。

廊下に出るなり、綾香は上機嫌で明久の左腕に右腕を絡め、手のひらを合わせて絡めるようにして手を繋ぐ。

「おっ昼っは、なっに食べよっかな あ、デザートもっけよっ
と いいよね？ アッキー」

「……ハア。別にかまわないよ」

楽しそうに訊ねる綾香に、明久は億劫そうに答える。

「むーノリ悪いぞ？ アツキー。楽しめ楽しめ」

そんな明久に、綾香は口をとんがらかせるが、すぐに笑顔になった。それを見た明久は自分の顔が、自然と弛むのを感じた。

「ちっ。夏目の奴、俺を袖にしておいてあんなバカとイチャつきやがって……。この俺をバカにするとうとうなるか、思い知らせてやるからな……」

だい　じゅうにもん！　だよ！？

お皿の上に載せられたハンバーグへ、乱暴にフォークが刺さる。その衝撃に一口サイズに切られたそれと、お皿が跳ねた。

への時に結ばれた口元へそれを運び、金髪の少女、綾香が仏頂面でそれを頬張った。

「なによアツキーってば！　雄二がアツキーを戦力に数える訳無いんだから、ミーティングなんて出る必要ないのに！」

ぶんすか怒りながら食事を続ける。

あの後、教室に戻った二人だったが、明久は食事をしながらミーティングをするという雄二達についていつてしまった。

その前に、明久は自分の財布からお金を出して、綾香に渡し、一人で食べに行くよう言ってきた。

明久的には、昼食は明久持ちというのを履行したつもりなのだろう。

だが、綾香は明久と二人で一緒に学食で食べるつもりだった。

そこで二人は揉めてしまった。

結局に明久はミーティングへ。

綾香は一人で学食へ来てしまった。

「食事をアツキーが持つ話なんだから、一緒に来るのが当たり前じゃない！」

ぶつぶつ文句を言いながらハンバーグの定食を平らげていく綾香と、そこに近づく影があった。

「……なんだか荒れてるわね？」

「ふへ？」

かけられた声に、ハンバーグを頬張ったままそちらを見る綾香。

そこにいたのはキツイ感じの顔が特徴的なクラス代表の小山友香がサンドイッチとミルクを載せたトレーを手に立っていた。

その姿に、綾香は口の中のを急いで嚥下していく。

「ぷはー。やつほ ゆっか」

去年クラスメイトだったこともあり、にこやかに挨拶する綾香。

「おひさ。なんだか荒れてるみたいだけど、どうしたの？」

対して友香は軽くはにかむように返すと、となり良い？ と、訊ね、綾香がうなずくのを見てから席に座った。

「それがさー、聞いてよ、ゆっか。アッキーがさー」

仏頂面のままそう切り出す綾香が珍しく、友香は聞く体勢になる。

「アッキーって吉井君？ 綾香の彼氏の？」

「違っつて。ただの従弟だよ。で、そのアッキーがさあ……」

と話を続けていく綾香。友香はそれを聞きながら顎に手を当てている。

「……なるほどねえ。試召戦争か。けど綾香、はつきり一緒に食べるって約束をしたわけじゃあないんでしょ？」

そう言われて綾香はフォークの先をくわえたまま固まった。

「それは……そうだけど……」

バツが悪そうに目を逸らしつつつぶやく綾香。

言っていることは解る。けれど納得できない。

綾香はそんな表情だ。

その様子を横目で見ながら、友香は軽く嘆息する。

「吉井君が坂本君たちに着いていったのには意味があるのかもよ？」

ちゃんと話し合った方が良いわね。本格的にこじれる前に

「……うん」

しんなりうなずく綾香。それを見ていて友香はため息一つ。

どう見ても痴話喧嘩だが、本人達にはまるでそのつもりがないらしい。

去年から見ていてやきもきすること甚だしいが、踏み込みすぎるのもこじれる要因だ。

だが、友香は普段見ているだけで元気になれるこの友人の力になってやりたかった。

「はあ。あ、そうだゆっか」

ため息をついた綾香が突然なにか思い出したような顔になる。

友香はまた相談かと、食事の手を止め、綾香の方を見た。

「なに？」

そう訊ねてくる友香に、綾香は口を開きかけ、軽く思案しつつ頭を軽く掻き始めた。

珍しく言い淀む彼女を、訝しげに見る友香。

「どうしたの？」

怪訝な様子で聞いてくる友香に、綾香は苦笑いを浮かべた。

「いやその……彼氏で思い出したんだけど……」

「？」

はつきりものを言う綾香にしては珍しい歯切れの悪さに、友香は首を傾げる。

「……うん、やっぱり言うお。ゆっかの彼氏なんだけど……」

「恭二？ 恭二がどうかしたの？」

「うん、その恭二君なんだけどね？ 二月の頭くらいにあたしに告つてきてさ……」

「……は？」

友香の目が点になった。

「断ったんだけどしつこくって……なんとならない？ 電話までかかってきてさ」

「へ、へえ……恭二が綾香にね……」

ひきつり気味に答える友香。

「やっぱり知らなかったんだ。こんなこと言いたくないけど、彼はやめた方が良いと思うよ？ いい噂も聞かないし……」

綾香は申し訳なさそうに続ける。すると友香はふらりと立ち上がった。

「教えてくれてありがとう。……ちょっと、恭二と話し合ってくるわね」

「う、うん……」

黒いモノをまといながら学食の出口へ向かった友香を見送りながら、綾香は教えない方が良かったかなあ。と、ひとりごちた。

だい　じゅうさんもんだい！！

カリカリとペンを走らせる音だけが、その教室に響く。

その教室に、幾人かの教師と、女生徒二人。

Fクラスの姫路瑞希と夏目綾香の二人が、試験を受けていた。

午後の授業開始時間と同時にFクラスはDクラスと交戦状態に入った。

それと同時に、点数の無い瑞希と綾香は回復試験に挑むことになる。

集中して問題を解いていく瑞希に対し、綾香は気もそぞろで集中できていない風だった。

それもそのはず、綾香は結局明久と話が出来ていなかった。

いろいろ悩んでいるうちに昼休みが終わりに近づき、あわてて戻ったときには、すでに開戦準備。

そのまま開戦してしまい、明久は前線へ。綾香は別室で回復試験に挑むことになった。

現在受けているのは数学のテスト。綾香がもつとも得意とし、一番好きな科目だ。

数式をパズルを解くかのように解いていくのが楽しく、寝食を忘れて解き続けることも出来るほどだ。

それが、まるで楽しくない。

どうしても明久の事が気になってしまい、それが彼女の集中を阻害しているのだ。

気持ちは晴れないまま、綾香の回復試験は続いていた。

一方、前線。

前衛がDクラスの先陣と激しい鏖迫り合いを繰り広げていた。その様子を見て、中堅部隊副隊長の島田美波は、中堅部隊が待機するEクラス前まで戻ってきた。

「吉井！ 木下の前衛部隊が、Dクラスとの戦闘に入ったわよ！」

「……………」

しかし、美波の報告を聞いた隊長の明久は何の反応も見せない。そんな彼の様子に、美波が怪訝そうにする。

「吉井？ 吉井ってば！」

「……………」

何度か呼んでみるが反応がない。

次の瞬間、美波の顔が特大の青筋となった。

「シャキッとしなさい！！」

「ごぶらばごべしゃっ?!」

美波の声とともに明久の横っ面へとコークスクリューブローが突き刺さり、明久の体はきりもみしながら吹っ飛んでいった。

「まったく、ぼんやりしてないでよね！ 木下達が支えきれなくなったら、ウチ達が代わりに前線を支えなきゃいけないのよ？ 隊長のあんたがそんなんじゃないのよ！」

「う……………そ、そうだね島田さん。僕たちのすぐ後ろは本陣。中堅隊が頑張らないと、後方で回復試験を受けるみんなが安心できないもんね」

そう言って立ち上がる明久。

それを見てうなづく美波。

と、そのとき、誰かの声が響いた。

『前衛が後退をし始めたぞ！』

その声に、明久は表情を引き締めながら口を開いた。

「よし、中堅部隊は前進するよ！ 後退してくる前衛のみんなを援護しつつ、戦線を形成するんだ！」

明久のその声に、中堅部隊が移動し始める。

すると、向こうから男子の制服をまとった美少女が走ってきた。

「木下！」

「む？ 島田に……明久か。すまんが頼むぞい。前衛部隊はボロボロじゃし、ワシの召喚獣も大分やられた」

「わかったよ、秀吉。後方で回復試験を受けてきて」

「……………んむ」

明久に言われるも、視線を外しながら脇を抜けていく秀吉。

そんな彼を、明久は少し悲しそうに見送った。

「どうしたのかしらね木下の奴。ミーティングの時も、あんたに目を合わせようとしなしいし」

「そうだった？ 僕は気づかなかったけど。疲れてるんじゃないかな？ 秀吉」

そう言っでごまかす明久だったが、内心、美波がなにか言い当てるのではないかと冷や冷やしていた。

「そんなことより、今は戦争に集中しなきゃね？ そう注意したのは島田さんだよ？」

「……………わかったわ。行きますよ吉井」

釈然としない面もちのまま、美波は動き出す。その後ろ姿に、明久の口が小さく何かをつぶやいた。そして後方へ走りゆく秀吉の背中へと一瞬視線を巡らせてから、瞑目し、振り切るように見開いて前線へと走り出した。

だい　じゅつよんもんさね。

派手な金属音を響かせ、火花を散らし、レイピアとロングソードが激突する。

「美春いい加減にして！　ウチにそのケは無いのよっ！！」

「嘘ですわっ！　美春とお姉さまは永遠の愛によって結ばれているのですわ！」

「ウチは普通に男の子の方が好きなのよっ！」

「あり得ませんわ！！」

ポニーテールを揺らした美波と、ドリルツインテの美春の応酬が続く。

前衛部隊と交代した中堅部隊。しかし、戦力的に劣るFクラス側は、そこかしこで劣勢に追いやられていた。

隊長格である明久や美波も参戦し、そこを美春に突かれた形だ。

「よ、吉井！　援護を！」

押し切られそうな美波は、明久に助けを求める。

と、同時に美春から吹き付けるような殺気を放射される。

「美春の邪魔をする豚はすべてコロします！」

Dクラスで相対した時を大きく上回る迫力。周囲の人間は、教師も生徒もDもFも関係なく怖れおののく。

ただ一人をのぞいて。

「試獣召喚サモン」

言霊に応じ、魔法陣が広がって、門が開く。

そこに顕現するは、一匹の使役獣。

両腕に籠手を詰め、学ランをまとい、右肩の肩当てに当てるように木刀を肩に担いだ召喚獣。主である明久の姿をディフォルメしたその姿でたたずむ。

その頭上に示される点数は、“46”。

「そんな雑魚召喚獣で美春に勝てると思わないことです！」

召喚したことで、敵対行動と認識した美春は、美波の召喚獣を捨て置き、明久の召喚獣へと己の召喚獣を走らせる。

突き出された剣を召喚獣に避けさせる明久。左足を引いて半身になるだけで、攻撃の軌道から外れ、美春の召喚獣はそのまま走り抜ける。

と、明久の召喚獣が足を引いた勢いそのまま体を旋回させ、籠手のはまった腕を、美春の召喚獣の後頭部にたたき込む。

ダメージを受けてたたら踏んだところへ、すかさず木刀を突き入れた。

後頭部をさらに痛打され、一気に点数が減る美春の召喚獣。

「そ、そんなバカなっ！！ 美春の召喚獣の方が強いはずですわ！！」

いいようにあしらわれてダメージを受けたことにショックを隠せない美春。

一方で明久はため息を吐く。

「やっぱり非力だなあ。もう少し点数採れるように頑張らないと……」
「戦闘中に余裕ですわね！」

美春の召喚獣が振り向きながら明久の召喚獣へと切りかかる。

それを丁寧避けさせ、明久はカウンター気味に木刀で美春の召喚獣を叩いていく。

みるみるポロポロになっていく美春の召喚獣。

「こ、こんな……こんなことが……」

為す術もなくやられていく自分の使役獣の姿に動揺する美春。

そして。

「スキあり！」

「あ」

横合いから美波の召喚獣が美春の召喚獣に切りかかり、倒してしまった。

あまりのことに、明久は目が点になる。

「あーっ？！ み、美春の召喚獣がつ！！ オノレ吉井明久あつ！！ なくなる上は、お姉さまだけでもっ！！」

「に、西村先生！ 戦死者です！ 早く連れて行って下さい！」
実力行使に及ぼうとする美春を指さし、美波が西村教諭を呼ぶ。

「ほう、清水か。たっぷり補習漬けにしてやる。覚悟しろ！」

「は、放して下さいまし！？ お姉さま！？ おねーさまー！？

こうなったのも、全部吉井明久のせいですわっ！！ 無事に卒業できると思わないで下さいまし！！ この豚野郎あーっ！！」

西村教諭に担がれながら叫び続ける美春。

その様に、戦争は一時的に停止していた。

そして明久は。

「……トドメさしたの、僕じゃないのに……」
がっくりとうなだれていた。

だい　じゅっごもんだ！

「回復試験お願いします！」

聞こえてきた女子生徒の声に、綾香は顔を上げた。

聞き覚えのあるその声は、美波のものだ。

その前にも、秀吉と数人の男子が回復試験を申請しているのを綾香は聞いている。

「科目はどうしますか？」

「化学をお願いします」

前線のメイン科目は化学らしい。秀吉らも大半が化学の回復試験を受けている。

綾香自身はこれまでに数学と世界史を終わらせていた。

雄二の話では、時間稼ぎを主とするため、途中で世界史へと科目変更すると言うことだったからだ。

そして今、美波が化学の試験を受けにきた。

美波は明久を隊長とする中堅部隊の副隊長だ。

それが回復試験を受けに来たということは、かなり劣勢なのかもしれない。

綾香はいったん軽く瞑目しながら思索し、ついで目を見開くと、手を挙げた。

「先生！　採点お願いします！」

「いいんですか？　夏目さん。まだ二十分ちょっとありますよ？」

綾香の言葉に驚いた“化学”教師がそう言うってくるが、綾香はつきり「ハイ」と返事をした。

その様子に瑞希と秀吉も驚いて顔を上げる。

化学教師がテストを回収し、手早く採点していく。

「はい、採点終了です。これは入力しておきますが、次はなにを受けますか？」

「いえ、結構です」
次のテスト科目を聞かれるも、それに首を振って立ち上がる綾香。ついで走り出した彼女に驚いて、皆が振り向く。教師の注意する声を背に走る綾香。その音を聞きながら、秀吉は唇を噛んだ。

一方、廊下戦。十八人居た明久率いる中堅部隊はすでに半分を切っていた。
Dクラス側にも相応の被害を与えはしたものの、戦力差があることは否めない。

部隊はもう半包囲されかけており、明久も召喚獣を呼び出し応戦している状況だ。

「……やっぱり地力が違うな」
被害の拡大を見て、一人ごちる明久。戦い続けた疲労がフィードバックとともに蓄積し、すでに肩で息をし始めている。

その召喚獣も、彼同様ぼろぼろの様相ではあるが、いまだ点数が三十点台をキープしているのは明久の操作技術のたまものだろう。だが、その動きは明らかに精彩を欠いていた。

「吉井明久覚悟！」
「大人しく討ち取られてよね！」
二体の召喚獣による同時攻撃。

「く……」
迫る長剣を籠手でいなしながら、頭上に迫る戦斧の持ち手を木刀で叩いて軌道をそらす。

そのまま体が回転し、長剣持ちの頭を蹴り飛ばし、体勢を崩した戦斧持ちの脇腹へと拳が突き刺さった。

もんどりうつ戦斧持ちを置き、長剣持ちへと踏み込んで木刀を相手へ突き込む。

その戦死を確認せずに戦斧へと振り向き、床をこするように木刀をアツパースイングで相手の顎へ打ち込み、さらに返す刀で頭頂を殴りつけた。

そして粒子に還る二匹の召喚獣。

明久の操作技術と戦いの知識と経験が、彼の召喚獣を点数では測れない強さに押し上げていた。

だが、彼以外のものはそうはいかない。

『だ、ダメだ！ やられる！』

『くそっ！ すまん吉井！』

『た、助けてくれ！ 補習はゴメンだ！』

『だ、だれか援護をつ！』

あっという間に討ち取られていく中堅部隊の男子生徒たち。

「み、みんなっ!？」

討ち取られていく仲間の姿に明久は動揺する。

そこへ攻撃を仕掛けられた。

「お前にも引導渡してやるよ！」

「くそっ！」

悪態をつきながら攻撃を避けさせる明久。だが、消耗し尽くし、五人からに囲まれた状況は絶望的だ。

逃げることもかなわぬなら、一人でも道連れにとばかりに明久が構えた瞬間。

キユキユツと、上靴が廊下をこする音が響き、その言霊が響いた。

「試獣召喚サモン!!!」

同時に二本の飛刀が飛び、二体の召喚獣を貫く。

そして、明久の視界の端に、金糸が舞った。

「……綾香」

つぶやく明久に伝えるように、蒼い瞳が彼を見た。

だい　じゅうるくもんなんだな

「……綾香」

「……アッキー」

二人の視線が絡み合い、眼差しが揺れる。

二人がどちらからともなく口を開きかけた瞬間、それを薙ぎ払うように大声が響く。

Dクラス前線指揮官の塚本だ。

『残り数人だ！　一気にしとめろ』

その声に従い、残っているDクラスの大半が、化学のフィールドへ突撃してくる。

二人はそちらへ向き直り、召喚獣を身構えさせた。

文月学園の冬服に、ガントレットとレガースを装備しただけの、デIFOオルメ綾香な彼女の召喚獣が、両手に一本ずつ持った紐を引くと、それが柄頭に繋がった柳葉刀が引き戻され、それを器用にキヤッチする綾香の召喚獣。

その頭上の数字は“81”。

並ぶように立つ明久の召喚獣は、“24”だ。

『残りは二人だ！　一気に押しつぶせ！』

その声に気づけば、中堅部隊の男子たちは一人残らず討ち取られていた。

対してDクラス部隊は、消耗はしているものの、十人以上残っている。

絶体絶命である。

にも関わらず、二人の顔には、焦燥も絶望も無い。

あるのは、互いの隣に立つ従姉弟への信頼感と安心感。

喧嘩をしても、隣に立てば安心できる。

そんな顔の二人が居た。

『押し包めっ！！』

だがそんなことはDクラスの面々には関係ない。

塚本の号令に従い、十人からのDクラス召喚獣が化学のフィールドを走る。

その前へ、綾香の召喚獣が柳葉刀を手放しながら、ステップを踏むように躍り出た。

左腕を大きく振り回すと、紐で繋がれた柳葉刀が大きく振り回され、召喚獣たちを薙ぎ払う。ついで綾香の召喚獣が、くるんと回転しながら右手を振るい、もう一方の柳葉刀が飛翔する。

それを受けた一体が光に還るのを待たずに綾香の召喚獣がステップを踏みながら両腕を振りかざし、回転しながら腕を開いて屈み込む。

さらに伸び上がるように立ち上がりながら腕を振りあげた。

そんな舞いに合わせ、二本の飛刀がフィールド内を縦横無尽に舞い踊り、Dクラスの召喚獣を切り裂いていく。

美しいまでの“死の舞踊”ダンスマカウル

それを召喚獣にあわせて綾香自身も舞う。

舞い踊る黄金の髪と、すべてを見透かすかのような蒼い瞳に、男女を問わず見とれてしまう。

その隙が、彼らの命取りだ。

彼らが見とれたのは、殺戮の舞い。その意味を彼ら自身が身を持って体験することとなる。

そんな死の刃が乱舞する中を、明久の召喚獣が疾る。刃と刃の間を潜り抜け、綾香の攻撃でダメージを受けた相手に一撃を加えて離脱。すかさず反撃に出ようとした相手は、真横から迫った柳葉刀に切り裂かれて光に変ずる。

アイコンタクトすら交わさぬ絶妙のコンビネーション。

綾香の刃が自らに当たるわけもないとばかりに駆け巡る明久の召喚獣。そして、綾香も明久に当たるわけがないと二本の飛刀を自在に振るう。

気づけば、ものの一分も経たずに、十体以上居たDクラスの召喚獣が五体にまで減じていた。

『な、なんてコンビだ……』

『こんなに強いなんて……』

『く、ほ、補習はゴメンだぜ』

二人のコンビネーションに、Dクラス側の動きが止まった。その時、よく通る大きな声が廊下に響きわたった。

『明久、夏目、あと少し持ちこたえろ！』

聞こえた声に、一瞬そちらを見る二人。

『スキ有り！』

思わぬ方から聞こえた声に、綾香がそちらを見れば、己の召喚獣に凶刃が迫っていた。

だい　じゅうななもんツス。

綾香の召喚獣に迫る凶刃。その刃が到達するより早く、そこに割り込む姿があった。

明久の召喚獣だ。

そのまま刃が彼の召喚獣の胸食い込み、あつという間に点数が無くなる。

そしてその刃の持ち主にもまた木刀が突き込まれていた。

当時に光へ還る二匹の召喚獣。

その様に、綾香の蒼い瞳が見開かれた。

するとすかさずそこへ、巖のごとき地獄への使者、鉄人西村宗一が現れる。

「戦死者は補習！！」

その声を聞くなり逃げ出したDクラス生徒をあつさり捕まえ、ついで明久へ目を向ける鉄人西村教諭。

「……なんだ逃げんのか吉井」

油断無くそう明久へ声をかける西村。

その言葉に明久が胸元へ手を当てながら苦笑いする。

「あはは、今更逃げても無駄でしょうし、それに……」

「それに……？」

軽く瞑目してうつむく明久。西村はその言葉の続きを促す。

「それに、守りたいものを守れましたから、後悔はないです」

晴れやかな様子で顔を上げる明久。

その言葉に、西村が口の端を緩める。

「そうか。なら補習室へ向かうぞ吉井」

「はい」

素直に西村に続く明久。

「あ……。アッキー……」

その様子を、綾香は呆然と見送る以外無かった。力無く持ち上がった腕は、明久に届くことは無く、ただただ無為に宙をさまよった。

「大丈夫だったか？ 夏目。明久は戦死か。まあ大勢に影響はないだろう」

本隊を率いて出ばつてきた雄二は、綾香の元にたどり着いて開口一番にそう言った。その周囲では残敵の掃討戦が繰り広げられている。

それを眺めて綾香は少しうなだれた。

「……そうかもね」

そう雄二に応え教室へと足を向ける綾香。

その様子に、雄二は小さく息を吐く。

「……明久が気になるのか？」

「え？ あ、ああそうね。あたしを庇って戦死したわけだしね。まったくバカだよ。せつかく補習を受けずに済みそうだったのにな。だからアッキーはバカだって言われるんだよ……」

いつもの快活さはそこに無く、少し困ったような顔で笑う綾香。それを見た雄二は嘆息する。

「……ま、良さ。掃討も済んだようだし、一端教室に戻るぞ。全員撤収だ！」

雄二の号令一下、Fクラスのメンバーが教室へ向けて歩きだす。

綾香もそれに続くようとして一端足を止め、明久が向かった先を見つめ、軽く唇をへの字に結んでから教室へ足を向けた。

「さて、回復試験を受けていた連中も戻ってきたし、そろそろDクラスの頭を穫るとするか」

双方共に兵を引き、一時的な小康状態に入ってはいたが、回復試験組が復帰したことで雄二は決断した。

その言葉に試験を終わらせてきた秀吉がうなずく。

「そうじゃな。ところで雄二よ。明久はどうしたのじゃ？ 姿が見えんが……」

「あいつは戦死だ。助けに来た夏目を庇ってな」

周囲を見回しそんなことを聞いてくる秀吉に、雄二はどうでも良さそうに答える。

それを聞いて秀吉はまっげをわずかに振るわせた。

「！？ そ、そうか。あ、綾香をのう……」

その様子に雄二は珍しいものを見たという風に片眉を跳ねさせた。それに気づいた秀吉がわずかににらむように雄二を見た。

「……なんじゃ？」

「いんや。秀吉が動揺するとは珍しいモンを見たなと思つてな」

「……ワシは動揺なぞしとらんぞい」

雄二の言葉を否定する秀吉だが、その口調には力がない。

そのまま逃げるように雄二から離れていく秀吉を見送りつつ、雄二は嘆息した。

「（あの秀吉が、よりもよって明久ともめ事か？ こっちの作戦に響かなきゃ良いんだが……）」

誰にも聞こえぬほど小さくつぶやく雄二。

それは、己に言い聞かせているかのようでもあった。

だい　じゅうはちもんアルヨ

Dクラスとの決着をつけるためにFクラスの残存戦力すべてが出撃し、もぬけの殻となった教室に綾香はひとりたたずんでいた。

雄二に気分が良くないと言って、作戦から外して貰ったのだ。

最初は渋っていた雄二だったが、瑞希の口添えもあって、最終的には折れてくれた。

頬杖をついて、ぼんやりと外を眺める綾香。

その耳には、下校する生徒を利用したゲリラ戦を仕掛けるFクラスの面々の声がわずかながらに聞こえてはいたが、綾香自身にとっではどうでもよく感じられた。

と、ひときわ大きな歓声が聞こえ、綾香の形の良い眉が小さく跳ねた。

「……勝ったんだ」

しかし、高揚感はない。その場にいないと言うのもあるだろう。

だが、それだけではない物足りなさが綾香をむしばむ。

次第に人のざわめきが教室に近づいてきたのに気づき、出入り口へ顔を向ける。

結構な人数の男子がぞろぞろとやってきたのを見て目当ての顔を探す。

『あれ？　夏目ちゃんだ』

『俺を待っていてくれたんだな』

『バカ言え、俺に決まっている』

『あの憂いを含んだ顔、きっと俺を心配して……』

『『『ないない』』』

『……デスヨナー』

教室に残っていた金髪碧眼の少女を認めたバカ達が、口々に勝手なことを言っていくが、綾香の耳を右から左へ抜けていった。

ふと、顔を上げて男子の一人に視線をあわせた。

「ねえ、新田君だっけ？」

「は、ははははい！ 新田純一です！ しゅ、趣味は……」

興奮した新田から視線を外しつつ、ただひとりを目線が探している。

「アッキーは？」

「……デスヨネー。はあ、吉井なら坂本の所へ行きましたよ」

「雄二の所？ ……ありがとう」

新田の答えに訝しげになった綾香は、お礼を言いつつ席を立つとそのまま教室から出ていってしまった。

そんな彼女の背中を、一同が見送った。

「なに？ 明久だと？ 確かに補習室から解放されて真っ先にこっ

ちへ来たが、先に教室へ戻ったはずだぞ？」

Dクラス代表と戦後交渉する雄二の元へやってきた綾香が明久のことを訊ねると、雄二は少し面倒そうに答えた。

「……そう」

その言葉に、綾香がちよっぴりしおれる。

その姿に、近くにいた秀吉が口を開いた。

「恐らく行き違いじゃろうて、すぐに戻れば会えるかもしれない」
言いながら慰めるように綾香の肩へ手を伸ばすが、その手が空を切った。

綾香がいきなり秀吉に向き直ったからだ。

「うん。ありがと秀吉。また明日ね？」

そう言っただけに笑いかけると、綾香はまた走り出した。

秀吉の手が所在無さげにさまよい、握りしめられる。

「……なるほど、夏目絡みか」

「?! ……何のことじゃ?」

雄二に言われて身を震わす秀吉。即座に取り繕うも、雄二の目は誤魔化せなかった。

「ポーカーフェイス、崩れてるぞ」

そう指摘してからDクラス代表の平賀に、タイミングは後で伝える。と言って交渉を終わらせた。

「……綾香はの」

「ん?」

「綾香は、ワシをきちんと男として見てくれているのじゃ。その証拠に、先ほども手を空かされたのじゃ。知っておるか? 綾香はあれでなかなか身持ちが硬いでな。男性が体に触れないように気を付けておるんじゃ」

「……いや」

「その事が嬉しくての。去年初めて会ったときから気になっておった。そして目で追うようになり、……気付いたら告白しておったのじゃ」

「おい……」

「いや、聞いて欲しいのじゃ。ワシのケジメのためにもの」

秀吉は泣きそうな顔で雄二に言う。

「普段なら軽い口調で断る綾香が真剣に考えて、答えてくれたのじゃ。そしてワシは振られた。初恋じゃった。じゃからこそ、綾香と仲良うしておる明久を見ると妬ましく思っじゃ」

「……」

「分かっておるんじゃ。ワシが女々しく引きずっておるだけじゃというこども」

ひとり喋り続ける秀吉の視界が揺らぐ。

「ダメじゃのうワシは。こんなだから“性別：秀吉”などと言われ
るんじゃろのう」

握った拳で顔を拭う秀吉。その肩に雄二が手をおいた。

「そんなことねえよ秀吉。それだけお前が夏目の事に本気だったって事だ。それなら明久を妬む気持ちだって当然だ。お前は立派な男だよ秀吉」

「……はは、そう言ってくれるのはお主くらいじゃのう。ワシが女じゃったら惚れとるぞい」

「……勘弁してくれ」

目元赤くしながら冗談めかして言う秀吉に、雄二はゲンナリとなる。それをみて秀吉が、冗談じゃよ。と笑った。

「うむ、すっきりしたわい。聞いてもらって良かったのじゃ。すぐにわだかまりが消えるとも思えんが、前へと踏み出せそうじゃ」

「そいつは良かった。んじゃ帰るとすつか」

晴れ晴れとした顔の秀吉に、雄二が笑いかける。

「心得た！」

それに応えて秀吉は笑った。

だい　じゅっきゅうもんでやんす。

Fクラスの戸を開けて、蒼い瞳が中を覗いた。

すでに、男子達は帰宅したようで、もぬけの殻……ではない。

ただ一人、ちゃぶ台に向かう人影。

柔らかそうなふわふわのピンクブロンドの少女がひとり。

「綾香ちゃん？」

「瑞希？」

思ってもみない人物に遭遇し、綾香は目をしばたかせる。

「どうしたんですか？　綾香ちゃん」

「瑞希こそ」

「私は少し疲れてしまって」

苦笑いしながら答える瑞希。

無理もない。午後からぶっ続けて四科目の試験を受け、さらには
試召戦争。体力のない瑞希には酷だったはずだ。

「大丈夫？　家まで送ろうか？」

心配そうに言う綾香へ、瑞希は首を振った。

「ひと息ついていただけですから大丈夫ですよ　それより、綾香
ちゃんはどうしたんですか？　誰かを探していたみたいですけど」

「え？　うん、アッキーをね」

そう答えて人差し指で頬を搔く。そんな綾香の様子に、瑞希は首
を傾げる。

「……綾香ちゃん、明久君と何かあったんですか？」

「へ？」

突然訊ねられてきよとんとなる綾香。その顔を見て、瑞希が小さ
く笑う。

「綾香ちゃんがこうやって頬を搔くときは大抵なにかを誤魔化そう
としておられるときですよ」

言いながら頬を掻くまねをする瑞希を見、自身のほほにやられた指先に視線を流す。

「あ、あはは、瑞希にはお見通しかあ。まあちょっと喧嘩をね……」
苦笑い気味に言う綾香を見て瑞希はわずかに驚いた表情をした。

「喧嘩……ですか？ 珍しいですね？」

言われて綾香は恥ずかしそうに頭を掻いた。

「ちよつと久々だったかも。でも、たぶんあたしが悪いのになって漠然と思う位なんだよね。ねえ瑞希。なんでアッキーは試召戦争に入れ込んでるのかわかる？」

ついでとばかりに瑞希に訊ねる綾香。瑞希は目をしばたかせ、明久君がですか？ とつぶやく。

綾香がそれに頷くのを見て瑞希は軽く思案するように見せてからイタズラっぽく笑って片目をつむった。

「なあんで、綾香ちゃんならもう答えがわかってるはずですよ」

「……」

言われて面食らうが、すぐに笑顔になった。

「ま、ね……アッキーが」

「明久君が」

綾香に合わせて瑞希も口を開く。

「一所懸命に」

「頑張るときは」

ふたりで瞑目し、同じ人を想う。

「「いつも誰かのため」」

唱和しながら目を開けて互いを見る、綾香と瑞希。
そしてどちらともなく笑い出す。

「……うん、わかってるんだ。アッキーが。明久がそういう奴だつてことくらい」

「ハイ」

視線を落としてつぶやく綾香に瑞希が返事をする。

「だから、いま、アイツにあって話がしたい」

綾香は少し照れくさそうに言う。それを聞いて瑞希は軽く頷いた。「明久君ならさつきまでいましたよ?」

「ほんと?! どこに行ったかわかる?」

「帰る支度をしてましたし、今頃昇降口じゃないかと思えますよ? 急げば間に合います」

綾香にそう答える瑞希。

それを聞いて綾香は自分のちゃぶ台の下から荷物を引っ張りだした。

「ありがと瑞希 愛してるよ」

「ふえっ?!」

教室から飛び出し際にそう言いながら、ウインクと投げキッスを飛ばす綾香。

瑞希はそれに面食らってしまう。

そのまま綾香を笑顔で送り出した瑞希だったが、窓の方に移動すると、グラウンドに視線を落とした。

そこに広がるのは黄昏時の校庭。

人の姿もまばらな空間に視線を巡らす。

それが、校門のところにある長い影に止まった。

瑞希には、それが“彼”だとわかった。

ふいに、昇降口から茜色を反射して光るものが飛び出していく。

それだけで、瑞希には“彼女”だとわかった。九百人から在籍する生徒の中でもあれほど見事なものはない。

茜色を反射したそれが、長い影へ近づいていく。

立ち止まり、二つとなった影がわずかに動く。

そして、二つの影が校門の向こうに消えるのを見ながら瑞希は優しく笑った。

だいにじゅうもんなのです

昇降口まで一気に駆け降り、周りを見回すも、求める影は見あたらない。

お互いの位置がわからないときは一人は動かず、もう一人が探す。ふたりの合流したいときの鉄則だ。

その際には、じっとしているのが苦手な綾香が探し、明久はなるべく綾香が見つけやすいところで待つ。これが二人のやり方。

だから明久があちこち移動して捕まらない場合は、意味があることが多い。

そして、最後に綾香が必ず探すであろう場所へと彼は移動するのだ。

だからこそ。

綾香はそこへ視線を向ける。案の定、校門のところにたたずむ長い影を見て、綾香はすぐに“彼”だとわかった。

上靴をスニーカーに履き換え、校庭を一直線に“彼”に向けて走る。

「アッキー！」

名前を呼ばれ、明久が振り向いた。はにかむように笑う明久を見て、綾香は戸惑う。

「じゃあ買い物をして帰ろうか」

そう言って歩きだそうとする彼に面食らいながらもつなずく綾香。「え？ う、うん」

いつもなら並んで帰る道。

綾香は何となく気後れしてしまい、二歩後ろをついていく。

それから二人は終始無言だ。

綾香は切り出すタイミングを見計らいながらもなかなか言い出せずにいる。

そのままつかず離れずスーパーに入り、夕飯の買い物をする二人。交わされる言葉はなにを買うかていど。

買い物が終わわり、家路に着くも、時間が経ってしまい、さらに切り出しにくくなった。

しかも綾香があれやこれや考えてる内に、明久の住む家族向けマンションへとたどり着いてしまい、そのまま二人で玄関をくぐる。

明久が、買い物袋を持ったまま台所へ入り、本日使う材料とそうでないものに分け、冷蔵庫にしまっていく。

その間に、綾香は買ってきた消耗品を、しまっていく。

これが二人の分担。普段の行動故に、そのまま作業をしてしまう。そして、いつもの流れで綾香は泊まりがけ用に置きっぱなしにしてある部屋着に着替えてしまい、明久の部屋と“泊まり用の自分の”部屋を簡単に掃除してしまう。

ついでにゴミをまとめながらマンガ類を片づけ、洗濯物を集める綾香。

一方で明久は夕食の準備に取りかかった。

明久が手慣れた様子で食事を準備する間、綾香は洗濯機に洗濯物を放り込んで洗濯。

そのままお風呂を掃除して湯張り。

そこまでやってリビングに戻ると夕食ができていた。

「洗濯や掃除もやっちゃったの？ 別に良かったのに」

「んー？ やりたかったから」

明久の言葉に生返事を返す綾香。

そのまま夕餉が始まった。

本日の夕食は、白飯に、豆腐の味噌汁。豚肉の生姜焼きに刻みキヤベツとプチトマト。そしてほうれん草のおひたしだ。

テレビのバラエティー番組をつけながら二人で夕食をとる。

その間……無言。

もはやどう切り出したら良いか、綾香にはわからなかったし、明久もどうしたものかと頭を悩ませる。

結局、食べ終わるまで終始会話は無く、二人は食べたものの味もわからない始末だ。

綾香は洗う物は自分がやるからと明久を風呂へ追いやり洗い場に立つと……頭を抱えた。

「ど、どうしょー」

弱々しくつぶやくその姿には、いつもの快活さは無い。

ともかくにも洗い物をすませてしまおう綾香。風呂から上がった明久に話そうと思っていると、明久がリビングにやってきて一言。

「お風呂空いたよ綾香。入っちゃいなよ」

「あ、うん」

反射的に返事をしながら風呂場に向かい。脱衣所に入ったところで頭を抱えてへたり込んだ。

「そうじゃないでしょ?! あたし!?!」

あーもー! とばかりに頭を掻きむしり。少し頭を冷やそうと風呂に入る絢香。

風呂から上がると髪の毛の水分を大雑把に取っただけで、ドライヤー片手にリビングへ向かう。するとソファで明久が待っていた。

そんな彼へ、「ん」。とドライヤーを渡す。

当然のようにそれを受け取る明久。

その隣に横向きに座って、濡れて灯りを照り返す金糸をさらす。

明久はそれを乾かし、手櫛で梳いていく。

この時間が綾香も明久も好きだ。

時を忘れて明久に髪を委ねる綾香。それを丁寧に入手入れしていく明久。

一通り髪が乾くとそれなりの時間だった。

ふと、明日は補給試験があることを思い出し、二人で勉強を始めてしまった。

それが終わる頃には、夜中を回りそうな時間だった。

勉強道具を片づけた明久が、おやすみ。と言いながら自室へ入っていくのを眺め、綾香は口をへの字に結ぶと立ち上がった。

明久がベッドで微睡んでいると、誰かが部屋に入ってきた。綾香だ。

そのまま明久のベッドまでやってくると、するりと潜り込んできた。

幼い時分より互いの布団に潜り込むのが習慣化している二人には当たり前のことであり今更何ということもない。

と。

突然明久は綾香の香りに包まれた。

綾香が背中から手を回して抱きついてきたからだ。

その手はわずかに強ばっていることに明久は気付いた。

互いの体が接しているところが熱くなる。

そして、綾香は明久の背中に顔をうずめるようにしながら、「…

…明久。ごめん」と、つぶやいた。

綾香が明久をきちんと名前と呼ぶときは真剣な時。これは二人の暗黙の了解だ。

そして、明久は彼女の手に分自分の手を重ね、「…うん」と、漏らす。

ついで明久は、身をよじり、綾香の方を向いて、彼女を抱きしめた。

「…僕も、ごめん」

明久の口からでた言葉に、綾香も「うん」と答える。

おでこをくつつけ、蒼い視線とコゲ茶の視線を絡まり合わせながら、二人で笑う。

お互い、相手のぬくもりを確かめるように抱きしめ合いながら、二人は眠りに落ちた。

翌朝。

明久は、なぜか床の上で目を覚ました。

だい にじゅうもんなのです (後書き)

さて、いかがでしたか？
今回の二人は。

“喧嘩をされていて”

このレベルです(笑)

それでは、また次回

だい にじゅういちもんですわよ

「みんな、おっはよー」

Fクラスの戸を開け放ち、綾香が開口一番元気良くあいさつする。それは、周囲を明るくし、皆に元気を与えるほどだ。

「お？ 明久に夏目、今日は早いじゃないか」

「ふっふーん まーねー」

「まあ、今朝の綾香はすんなり起きたしね」

調子に乗ってふんぞり返る綾香の横で、明久は苦笑いを浮かべた。そこへ秀吉がやってくる。

「お早うじゃ、明久に綾香よ」

にこやかに笑って、“二人”に挨拶する秀吉。

その様子に明久と綾香が笑顔になる。

「うん、お早う秀吉」

「おっす 秀吉 今日も可愛いな」

「やれやれ、それは男へのほめ言葉ではないぞい？ 綾香よ」

綾香に可愛いと言われ、苦笑いする秀吉。すると、綾香が顔をツイと近づけて、秀吉の胸を人差し指でつつく。

「なに言ってるの。今時、男の子が可愛いのだって十分ステータスだつて。秀吉は、もっとそれを武器にするべきかな？」

言いながら片目をつむった綾香に、秀吉は何も言えずに朱を散らす。

そのまま固まってしまった彼を置いて、綾香は明久へと向き直った。

「行こ」

そういつて綾香は明久の手を取ると、自分のちゃぶ台へと向かった。

「おーい、秀吉ー」

「……………完全に固まっている」
動かない秀吉に、雄二と康太がのぞき込みながら肩を揺らすのが、反応がなかった。

「うー。疲れたよう……………」
ちゃぶ台に上半身とあごを乗せ、両腕を前へ放り出しながら、綾香が呻く。

癖はあるが美しい金糸が広がり、ブレザーに包まれながらも、男達の夢が詰まった大きな綾香のそれが、上に誰かが乗ったバランスポールのようにひしゃげる。周囲の男子達はそれだけで後頭部を叩き始めた。

「あはは、おつかれさま」
そんな注目をされている綾香の後ろで苦笑いしながらねぎらうのは明久だ。

戦争では総合科目があったため、補給試験もまんべんなく受けなければならぬ。

そのため、今日一日と明日の午前中で併せて十科目以上テストを受けなければならぬのだ。

「くあー、腹減ったぜ。今日はラーメンとカツ丼とカレーとチャーハンにすっか」

軽く伸びをしてからそう言って立ち上がる雄二を、綾香が半眼で眺める。

と、おもむろに口を開くと、「よく喰うねえ雄二は」
言つと雄二が首を「ぎぎぎ鳴らしながら「育ち盛りなんだよ」と、笑ってみせる。

それを見ながら綾香が身を起こし、立ち上がった。

「行こうアッキー。腹減ったー」

少々元気のない調子で綾香が明久の袖を引っ張った。

「……わかったよ。姫路さん！」

綾香に答えつつ、明久が瑞希へ声をかけた。

「？ はい、なんででしょう？」

「ごめん、昨日の約束だけど、綾香に付き合わなきゃいけないから、また今度ね？」

「あ、そうなんですか？ 残念です」

明久の言葉に瑞希は残念そうに眉を八の字にした。

そうして教室を後にする明久と綾香。

「どしたの？ 瑞希となんか約束？」

聞きながら明久の腕を取り、下から見上げるように彼の顔をのぞき込んだ。

「うん、お弁当の味見をね」

「え」

明久の返答に、綾香は声を裏返ししながら目をむいた。

「み、瑞希のお弁当の？！ アッキー死ぬ気？！」

「だ、大丈夫だと思うけど……」

明久も自信はないのか言葉は尻すぼみになっていく。

「去年一緒にお弁当したとき、『にくじゃが……中和が』とか言っていたし、直ってないんじゃないかな……」

そう言いつつ綾香が体を震わせる。

明久も綾香の言葉に遠い目となった。

そして思い出されるのは中学の頃。

学校が別々だった瑞希は、明久とはなかなか会う機会がなかったが、連絡を取り合っていた綾香のおかげで、たまたま予定が合った三人は、ピクニックに出かけた。幼なじみ三人で遠慮無く楽しもうと計画したものだだったが、瑞希がお弁当担当だったのが運の尽きだった。

もはや食べ物ではないソレのおかげで三人とも倒れ、かなりやばいことになった。

一番頑丈な明久が、半死半生のままサバイバル知識を元に薬草などから解毒剤をそれこそ必死になって完成させ、事なきを得た。

後でわかったことだが、これがショックだったのか、瑞希はそのときのことをまるで覚えてなかった。その記憶が二人の脳裏によみがえり、そろって震えた。

「か、考えるのはよそう」

「そうだね。今は普通にご飯を食べよ」と

二人でうなずき、学食へと向かう。

だいにじゅうにもんなのじゃ！

白い手で握られた箸が、少し大きめに切られたチキン南蛮を一切れ摘み、それを口元へと運ぶ。

普段なら小さく上品に感じられる、形の良い唇がこれでもか！とばかりに大きく開けられ、タルタルソースの付いたソレにかぶりついた。

「んぐむぐ……うんめーっ」

適宜に咀嚼し、チキンを味わう綾香。

金髪のお嬢様のような美少女然とした彼女だが、感覚は庶民的だし、普段から明久とご飯の取り合い押しつけ合いばかりしていたせいか、上品さはない。

しかし、食事は楽しくおいしくを体現するかのような食べっぷりは、かえって彼女の魅力になっていた。

そしてその隣に定食の乗ったトレーを持って明久がやってきた。それに気づいて手を止める綾香。

「アッキーはなんにしたの？」

「日替わり定食だよ」

着席しながらトレーを置きつつ答える明久。

綾香は、ふーん。と定食の内容を眺めていたが、とある一品を見たとき、電撃が走った。

「あ、アッキー……、そ、それはまさかっ！！」

「うん、僕もちよっとびっくりした」

おののくように言う綾香に、明久は苦笑い気味に返す。

綾香の言うそれとは……。

「カ、カニクリームコロッケじゃん！！」

そう、日替わり定食のめいんでいっしゅはメンチカツと二個乗ったカニクリームコロッケだった。

日替わり定食は、学食のおばちゃんがわりとてきとーに決めているため、普段は存在しないメニューがある時があるのだ。

綾香の蒼い瞳は、そのキツネ色の衣に釘付けた。

綾香ののどが溢れんばかりの唾を嚙下する音が明久の耳に入った。「む、ぐう。いくら何でも雄二じゃないから定食二人前なんて無理だし……な、なあアツキートレードしよう。チキン南蛮一切れやるから、一個くれよ……いや、交換して下さい」

土下座せんばかりの勢いで明久に頼み込む綾香。その様子に明久はやれやれと言わんばかりの顔になる。

「まあ良いけど……はい」

少し笑いながら箸でカニクリームコロッケを摘むと、綾香へ差し出す。すると綾香は蒼い瞳に を散らしながら喜び口を開けた。

「あーん」

「……しょうがないなあ綾香は」

ひな鳥が親鳥に餌を貰うように口を開けて待つ綾香に苦笑しつつ明久はカニクリームコロッケを彼女の口へ。

一個まるまるほおばる綾香。

ほっぺたをリスのように膨らませ、蒼い瞳を にしながら軽くじたんだを踏む。

「むぐ、むぐ、ふめー」

まだ口の中に残っているにも関わらず、いかにもうまそうに興奮気味に言う綾香。それを見て明久は笑顔になる。

「んぐ、んぐ、ぷへー。ほんとにうまいぞこれ！ しかも冷凍もんじゃないなくて手作りだ！」

「え？ うそっ!？」

綾香の一言に、明久もあわててもう一つのカニクリームコロッケにかぶりつく。

「……ほんとだ。しかもカニの風味がすごい！」

「だろ？ こういうところは無駄にすごいよな文月学園って」
そう言いつつ白飯を掻き込み、味噌汁をすする綾香。

その様子に微笑みながら明久は綾香のお皿に箸をのばした。

「んじゃ、約束の一切れを……」

「ん？ そうだな。ホレ、あ〜ん」

明久が一切れ摘むより素早く皿を遠ざけつつ、半分かじったチキン南蛮を差し出してくる綾香。

「それ、半分かじってあるよね」

「あ〜ん」

「約束は一切れのはずなんだけど？」

「あ〜ん」

「……」

「あ〜ん」

「……わかったよ。あー」

けして譲らぬ綾香に嘆息しつつ口を開ける明久。そこへ綾香が南蛮を摘んだ箸をつっこみ、明久は口を閉じた。

ちゅぷん。

と、明久の口から綾香が自分の箸が抜き取った。

「あ、南蛮もおいしい」

つぶやく明久に、彼女はニコニコしながら食事に戻ろうと、軽く箸の先つちよをしゃぶってから次のチキン南蛮を箸で摘んだ。

幼い頃より互いの口を付けたものを普通に食べさせあったり、おやつ的一半こなど日常茶飯事な二人にとっては、ごく自然なこと。

もちろん、綾香に言わせれば、“まるまる一切れあげるより、半分になったのを渡した方が損は少ない”という判断からの行動だが、周りの判断は異なるだろう。

と、綾香の隣に人影が現れた。

「……相変わらずね？ あなた達は」

と、言われ、綾香はご飯を口一杯に頬張ったままそちらを見上げ

た。

「ふあ。ゆつふあ（あ。ゆつか）」

「口の中に食べ物積めた状態でしゃべらないの。相変わらず行儀が悪いんだから。吉井君も久しぶり。ここ、いいかしら？」

「久しぶり小山さん。かまわないと思うよ？」

友香に注意されて綾香が口の中のモノを必死で嚥下している間、

明久と挨拶を交わした友香は明久とは綾香を挟んで反対の席に座る。

テーブルに置いたトレイには、やはりサンドイッチとミルク。

「ング、ング……ふはあ。ゆつか昨日振り」

「仲直りできたみたいね？」

「うん　ありがとねゆつか」

ほっぺにご飯粒ひとつ付けたまま笑顔でお礼を言う綾香に、友香も微笑んだ。

それから周囲を見回すと、一言漏らす。

「でも、仲が良いのは分かるけど程々にね？」

見ればブラックコーヒーの注文や砂糖以外の調味料を追加している生徒が続出し、あてられたカップルがイチャつき始めていた。しかし、当の明久や綾香は気づいておらず、二人そろって首を傾げており、それを見た友香が嘆息した。

だい にじゅうさんもんであーる。

学食での昼食を終えた明久と綾香は、瑞希の弁当の味見をしているであろう屋上へと足を向けた。

なんとというか、“知るものの責任”みたいなものを感じてしまったからだ。

処刑台の十三階段を昇る面持ちで屋上への階段を上がり、死地へ赴く覚悟で屋上に続くドアを開けた。

そこに広がる光景は……。

青くなって震える美波。

白目をむいて倒れる康太。

明らかに死相が浮いている雄二。

エビフライをくわえたまま泡を吹いて転がる秀吉。

そして……何が起きているのか、いまいち理解していないっばい
笑顔で座る瑞希の姿があった。

惨憺たる有様である。

「こ、これは……ゆ、雄二？」

表情をひきつらせ、絶句しながらもなんとか雄二へ声をかける明久。

「う？ あ、明久か？ よく見えん……花畑と川が……」

「駄目だ雄二！！ その川を渡っちゃあ！！」

無事なように見えて、実は駄目らしかった。

「怖かったわ……怖かったのよお綾香あゝ」

未だに震えの止まらない美波の頭を、よしよし。とばかりに撫でる綾香。

明久と軽く相談した結果、彼が注意するということで、瑞希を向こうへ連れていった。

その間、明久に一発貰って正気を取り戻した雄二は、康太の蘇生作業をしており、秀吉はというと……。

「う……なんじゃ？ ワシはいつたい……」

後頭部に柔らかい羽毛に包まれているかのような感触を感じながら、秀吉が目を覚ますと、蒼い瞳が上からのぞき込んできた。

「あ、秀吉、起きたー？」

「……は？」

綾香の声に、秀吉の思考が一瞬止まり、視界に存在する彼女の女の象徴の迫力に息を呑む。

そして気づいた。

今、自分が。

大好きな少女《綾香》に。

膝枕されていることに。

「……………」

そこへ思考が至った瞬間、秀吉は全身が石のように固まり、真っ赤に染まった。

そして。

「のうっはあぁ~~~~っ?! (ブシャアアア~~~~!!)」
康太もかくやと言っほどの鼻血を噴出し、昏倒する秀吉。

「きゃっ?! ちょ、ちよっど?! 秀吉っ?! だ、大丈夫なの?!」

突然のことに悲鳴を上げてしまう綾香。

ついで秀吉を見ると、滝のような鼻血を垂れ流しつつ幸せそうに永眠しようとしているところだった。

「(我が生涯に、一片の悔い無しじゃ……………」
そのつぶやきは誰にも聞こえない。

それを見て綾香と美波があわてて秀吉の蘇生作業に入った。

その様子を雄二と、意識を取り戻した康太がうるんげに眺める。

「……………よく見とけムツツリーニ。あれが普段のお前だ」

「……………断じて認めない(カタカタカタ)」

いまだ体の震えが止まらないながらも必死で否定する康太。

そんな騒ぎになっているところへ、ずーんと落ち込みオーラをまとい、肩を落とした瑞希と、それを慰める明久がやってくる。

「……………うう。私もお料理やめます……………」

「だから化学薬品混入さえやめれば大丈夫だからって……………何事!?!」
「き、木下君っ?!」

戻ってきた明久と瑞希は、血溜まりを作って昏倒している秀吉を見て声を上げる。

秀吉の靈魂が手を振り天空へ還ろうとしているのを見て瑞希は決意した。

「……私、もう化学薬品使いません……」

……私、もう化学薬品使いません……
これが後に、“癒しの料理人”^{ヒールینگシェフ}と呼ばれるようになる世界的料理人が最初に誓った言葉だと言われた。

そんなトラブルは、まあ余談な訳だが、一同復活し、車座になって座る。

「そう言えば坂本。次の目標はBクラスなの？」

美波がそう訊ねると、雄二は大きくうなずいた。

「ああそうだ」

それに対し、その場の全員が顔を見合わせる。

「雄二、どうしてBクラスなのさ？ 目標はAクラスなんだろう？」

「……正直に言おう。どんな作戦でもうちの戦力じゃAクラスには勝てない」

明久の問いに、神妙そうな顔で言い切る雄二。

その雰囲気一同息を呑む。

無理もないだろう。Aクラス上位十名は平均三百点オーバーの化け物ぞろいだ。学年二位の瑞希ならまだ何とかなるかもしれないが、綾香ですら得意の物理と数学以外では負ける公算が大きい。

そしてAクラス代表は第二学年最高成績者。

対抗できる手段は片手で数えられるし、下手をすれば代表一人でFクラスの生徒をほとんどせん滅できるだろう。

最後の一手が打てない以上、勝つのは不可能に等しいのだ。

「んじゃ、狙うのはBクラスに変更なの？ 雄二」

少しまじめな様子で綾香が聞いてくるが、それに対しては首を振

った。

「いや、Aクラスをやる。これに変更はない」

力強く言う雄二にみなが困惑する。

「クラス単位じゃ無理だからな。一騎打ちに持ち込む。その交渉力
ードにBクラスが必要なんだ」

「ははあん。Bクラスに攻め込ますぞつて脅すつもりだろ。Aクラスは戦争に勝つても旨みがないから嫌がるだろうしな」

雄二の言にピンときたのか綾香がいつもの小悪魔スマイルを浮かべながら言つと、雄二も悪童らしく笑う。

「ああそつだ。Bの連中には設備をFに落とされたくなけりや言うことを聞けつて交渉する」

雄二の言葉を聞いて綾香はさらに笑みを深くした。この二人、すっかり悪人風である。

しかし、そこで明久が口を挟んだ。

「でも、一騎打ちで勝てるの？ 雄二」

「そこに関しては任せておけ。勝算はある」

雄二は自信たっぷりに答えるが、明久は不安が拭えなかった。

「なら良いけど……」

「とにかく、まずはBクラスだ。これをクリアしなけりや次の段階には進めないからな」

雄二の言葉に、一同うなずいた。

だい にじゅうよんもんであります！

皆の反応にうなずいた雄二は明久の方を向いた。

「と、まあそういう訳だから明久」

「……なんだよ」

イイ笑顔の雄二に不信の目を向ける明久。しかし雄二はかまわず続ける。

「とつととBクラスに宣戦布告してこい」

「断る。雄二が行けば良いだろ」

即答だった。

そんな明久の態度に雄二がため息をつく。

「……明久。またトラブルが起きるとでも思ってるのか？ Bクラスは上位クラスなんだからそんなことするわけ……」

「Bクラスの代表が、あの根本恭二でも？」

明久を言いくるめようとする雄二の言葉を遮るように、蒼い瞳の少女の声が響いた。

その内容に、明久と瑞希以外が驚く。

「……根本がBクラス代表だと？」

「そ。さつきゆっか……あたしの友達の小山友香に聞いたから確かだよ。ね？ アッキー」

少しつまらなそうに伸びをしながら明久に振る綾香。

その言葉に明久は力強くうなずく。

それを見た雄二は、顎に手を当てて考え始める。

「……その小山ってのは信用できるのか？」

雄二のその問いに、今度は綾香の顔色が変わった。

「ちよつと雄二。あたしの親友を疑う気？ 確かにゆっかは恭二と付き合ってたけど、昨日別れたって言ってたし」

「根本と？ 物好きな女だな」

「……雄二。あんたね」

雄二の小馬鹿にしたような言いように、綾香の表情が険しくなる。先ほどまで意気投合していたとは思えないほど二人の空気が悪くなつていくのが手に取るように分かった。

そこで明久が割つてはいる。

「ちよつと落ち着きなよ二人とも」

それによつて二人とも無言で矛を収めた。

「雄二、宣戦布告には僕が行つてくる。根本君がいるかどうかも確認してくる。それで良いでしょ？」

明久がそう提案すると、雄二がうなずく。

「ああ、そうしてくれると助かるな」

「……じゃああたしも行くよ」

明久の提案を呑んだ雄二の言葉に綾香が続いた。

これに焦つたのは雄二だ。

「いや、お前は……」

「問題ないでしょ？ “安全”なんだし。行こ？ アッキー」

だめだと言おうとした雄二の言葉にかぶせるように綾香が言い放つ。

そして、さつと立ち上がつて屋上入り口へと歩き始めた。

それを見て明久が慌てる。

「ちよつと待つてよ綾香！ ごめん雄二。綾香と一緒に行くよ。けど、雄二も悪いんだよ？」

そう言いながら綾香を追いかける明久。

後には微妙な空気のままの五人が取り残された。

「綾香、綾香つてば！」

「なに？ アッキー」

明久に応じつつも足を止めない綾香。

「雄二にだって立場があるんだから、許してあげなよ」

「……確かに、代表なんだし情報の真贋に過敏になるのはわかるけど……」

それでも綾香は友香を悪く言われたのが悔しかった。

一年Aクラスで一緒のクラスだった彼女は、最初こそツンケンして怒りつぽい感じだったが、綾香とつきあい始めてからカドが取れ、落ち着いた性格になっていった。

その頃には綾香とは親友と呼べるほど仲良くなっていた。

明久もそのことは知っていたし、綾香の気持ちも痛いほど分かった。その反面、雄二の言うことも分かる。

「雄二はさ、あれでもFクラスの責任者なんだよ。自覚があるかは微妙だけど、そういう責任感から出た言葉だって思えないかな？」

綾香になんとか分かって貰おうと言葉を続ける明久。

それを聞いて綾香は小さく息を吐く。

そして明久の方へ振り向いた。

「……アッキー優しすぎ。まあ、そこがアッキーらしいけどね。ほら、行こ？」

そのまま明久の横にやってきて、彼の手を取って歩き始めた。

ところ変わってBクラスの教室。

Aクラスほどでは無いものの、一般的な高校と比べれば、十二分にお金のかかっている設備の教室だ。

スライドドアが音もなく開き、ポリウムのある金髪と蒼い瞳の少女と、優しい雰囲気だが、どこかネジが一本足りなさそうな少年が入室してきた。

「しっつれーしまー」

「Bクラスの代表の方はおられますかー？」

Bの教室に足を踏み入れた綾香が元気良く挨拶し、明久が教室を

見回すようにしながらそれに続いた。

「あれ？ 綾香じゃない」

「ほんとだ。綾香久しぶり」

不意に声をかけられた綾香がそちらを見ると、一年の時同じクラスだった岩下律子と菊入真由美が小走りによって来た。

「どうしたの綾香。遊びに来たの？」

「ていうか、クラスどこよ？ 遊びに行くわよ」

にこやかにそう話しかけてくる律子と真由美に、綾香は少し困ったような顔になった。

「いやあ、うちの教室はお勧めしないかな？ Fクラスだし」

「F?!」

綾香の答えに二人の驚愕が重なる。

「はあ、どうりであんな奴が代表の訳だ」

「あたし達、てつきり綾香がBクラス代表だと思ってたしね」

嘆息しつつげんりしながら漏らす二人。

その様子に綾香と明久は顔を見合わせた。

そして明久が一步踏み出し二人に声をかけた。

「えっと、岩下さんに菊入さん、久しぶり。それでBクラスの代表は？」

「あ、吉井君」

「相変わらず綾香と仲が良いのね？ で、代表だっけ」

「今呼ぶからちよつと待ってて？ 代表ー！」

律子が教室の奥へと呼びかけると、数人の取り巻きを引き連れた一人の男がやってきた。

ツヤのある髪をマッシュルームカットにし、アゴ先に少し髭を伸ばした嫌らしい目つきの男。

根本恭二。

卑怯卑劣で知れたこの男が、綾香と明久の前に現れた。

だい にじゅうごもんだぜえ〜？

「よお、夏目。俺の告白受けてくれる気になったのか？」

開口一番そんなことを言ってくる根本に、綾香は顔をしかめた。

友香の話によれば、昨日のうちに話し合っただけで別れたらしいが、そのこと自体どうとも思っていないようだ。

「……その話は何度も断ってるよね。あたし、しつこい人って嫌いなんだけど？」

根本の顔をにらみながら言う綾香。だが、彼は動じた風でもない。以前断ってにらんだときは明らかに怯んでいたが、今は余裕しゃくしゃくだ。

その差に綾香は違和感を覚えた。

と、その時明久が横から一步前に踏み出してきた。

「えっと、根本君がBクラスの代表なんだよね？」

「あん？ なんだゴミクズか」

話しかけた明久をゴミクズ扱いする根本。それと同時に取り巻きどもが笑い出す。

その様子に律子と真由美はあからさまに嫌悪感を表し、綾香は顔色を変えた。

「恭二！ あんたっ！！」

激高し、詰め寄ろうとする綾香を明久が制する。

「改めて、二年Fクラスの吉井明久です」

「ハッ。ゴミの分際で名乗りかよ」

「僕たちFクラスは、明日の午後の授業開始時刻を以て、Bクラスに宣戦布告します！」

「！！」

明久のその言葉に、根本のみならず、取り巻きも、律子も、真由美も、Bクラスの全員が絶句した。

一瞬の沈黙の後、根本が肩を震わせ始める。

「……ク、ククク……ハ、ハハハ……アツハツハツハツハ！
Fクラスが？ 俺たちBクラスに？ 何の冗談だ？」

爆笑しながら明久に訊ねる根本。

そのままズイツと顔を近づけ、笑みを消す。

「……笑えねえな」

明久の目をのぞき込むように言う根本。だが、明久の表情は小揺るぎもしない。

根本はしばらく明久をにらみつけていたが明久は柔和に笑みを浮かべてみせる。

「……そういう訳ですから。用件もすみましたし、僕たちは帰らせていただきますね？」

そう言ってきびすを返し、綾香へ、戻ろうか？ と声をかけて歩き出す明久。

だが、明久のその態度に、根本が頬肉を震わせる。

「余裕ぶってんじゃねえ！ やれ！ お前ら！！」

彼の叫びに取り巻きがふたり飛び出していく。

突き出された拳が明久の後頭部に迫り、激突……しなかった。

腰を落としながら体を反転させ、相手の足下へと大きく一歩踏み出す。

上体が伸びた相手の下に入り込んだ明久は、そのまま踏み込んだ足を踏ん張り、上体を上へと跳ね上げた。

ほとんど真上へと肩胛骨を叩きつけ、相手の体が宙を舞う。

「ガツハツ?!」

肺の中の空気をすべて吐き出し、重力と均衡した体が停止して落下する。

その下敷きにならぬよう、明久は素早く体をスライドさせた。

そして、その男は床へと落ち、悶絶する。

一方、もう一人は繰り出した拳を綾香にとられ、ひねりあげられながら額を床に着けていた。

瞬時に二人を制圧され、狼狽する根本。

しかし、すぐさま我を取り戻すと、残りの取り巻きにも攻撃を仕掛けさせる。

その数四人。明久と綾香はすぐさま思考を切り替えた。

綾香が視線をそらし、ドアの方へ振り向きながら「あ！ 鉄人先生！」と叫ぶ。

その名前が出ただけで四人の足が一瞬止まった。

その隙に明久と綾香は即座に飛び退いて走り出す。

根本らは啞然とそれを見送ってしまった。

「！ 鉄人なんざいないじゃないか！ ボケつとすんな！」

いち早く正気に戻った根本が叫ぶが、時すでに遅し。明久と綾香は脱兎の勢いで走り去った後だった。

「くそつ！ 吉井の奴め……。まあ良い。切り札はこちらの手にあるんだ。これで夏目は……くっくっくっ」

だい にじゅうろくもんですのー

「そうか、根本はいたか……」

Bクラスへの宣戦布告を終えて戻ってきた明久達の話聞き、雄二は顎に手を当てながら考える。

その態度に綾香はムツとなる。

「それだけ？ ほかにも言うことあるでしょ？」

「……さてな。なんかあつたか？」

綾香に言われるもとぼける雄二。それを見て明久は顔をしかめた。

「……雄二、あんたね」

「後にしてくれ。作戦を補正しなきゃならん」

詰め寄ろうとする綾香を避けて行こうとする雄二。綾香がその手を素早く取る。

そして一瞬の間を置いて自分の胸に雄二の手をくつつけた。

その行動に雄二は大いに慌てた。

「な、なにやっつてんだお前はっ！」

「きゃー雄二があたしの胸触ったー」

「は、はあっ?! な、なに言っつてやがるっ!?!」

「いやー揉みしだいたー」

「てめえ、いい加減に……ハッ?!」

棒読みながらも騒ぐ綾香に抗議する雄二だったが、周囲に膨れ上がった殺気に気づく。

「……雄二。お主良い度胸じゃのう」

『綾香ちゃんの胸を揉みしだくなど、羨ま……万死に値する!』

『このゴリラが。調子にのってんじゃねーぞ?』

Fクラス男子の押さえきれない嫉妬と殺意を一身に受け、雄二は後ずさる。

「ま、まてお前ら。これは夏目が勝手にやったこと……」

「問答無用じゃ！」

『坂本を殺せえーっ！っ！』

「チキショー！！俺がなにをしたーっ！！」

綾香の手を振り払って逃げ出す雄二。それを追跡する覆面の集団。デスチエイスが始まった。

「ざまみろアホ雄二」

綾香は走っていく雄二の背に向けて舌を出しながら胸元を手で払った。

結局、雄二と彼を追跡していた秀吉以下Fクラスの男子達は鉄人に捕まり、補習室で補給試験を受けつつ、休み時間と試験終了後に補習を受ける羽目になったらしい。

教室で午後のテストを受けたのは明久、綾香、瑞希、美波のたった四人だった。

終わりのHRもその四人だけで、その後の清掃が少し大変だったが他には問題ないようだった。

校門を出たところで、用事があるというほかの二人と別れ、家路につく明久と綾香。

「ったく。雄二があんなアホだと思わなかったよ」

「雄二は誰かに頭を下げるのが嫌いだからね」

ブックサ言う綾香に明久が苦笑い気味に答える。

「まーいや。仕返しもしたし、溜飲を下げてやろう」

「あはは……でも、ああいうのはやめた方が良いよ？ その、さわらせるとか」

えらそうにふんぞり返る綾香を明久がたしなめる。

すると綾香は不思議そうにしながら明久の方を見て笑う。

「なーに？ アッキー。ヤキモチ？ ブラの上に手をつけたただけだよ？ 減るわけでも無し……」

「またそんなこと言ってる……」

楽しそうな綾香に明久は嘆息した。

それをのぞき込む綾香。そして楽しげに笑い、学生鞆を後ろ手に持ちながら一歩、二歩と後ろへ跳んだ。

「……なーによ。もしかしてイヤだったとか？ けどアッキーは直揉みしたことだってあ……」

ニヤニヤとあの小悪魔スマイルを浮かべながら明久を見る綾香。

それに対して明久は少し視線を外した。

「別に……そんなこと……」

言いよどむ彼に綾香は少し不思議そうな顔になったが、やがて小さく笑うながらくると向こうを向いて歩き出す。

黄昏時の陽に照らされながら二人そろって無言でしばし歩く。

不意に綾香の足が止まった。

「あ！ そーだっ！」

「な、なに」

突然大きな声を出した綾香に、明久も驚いて足を止める。

軽く一歩跳んで、着地と同時にターン。

長い金髪が、茜色の光を受けて輝きながら、スカートとともに広がる。

「プリン」

「へっ？」

綾香の言葉に、明久は一瞬反応できない。

「だから、プリンよ。プ・リ・ン。昨日買わなかったじゃない」

「あ。そう言えばそうだね」

「よし！ 今から買いに行こう」

そう言って明久の元へ小走りに走りよると、その手を取って引っ張り出す。

明久が、わかったよ。と、苦笑いしながら応じて歩きだすと、綾香は彼の腕に自分の腕を絡めた。

二人で歩く黄昏時の道。彼らの足下から伸びる影は、ひとつだ。

だいにじゅうななもんやなあ。

軽い買い物の後、明久と綾香はとある一戸建ての前に着ていた。

表札には『夏目』とある。

「たっだいま〜」

玄関の鍵を開け、スキップするように三和土へ靴を脱ぎ散らかしながら入っていく綾香。

「ただいま」

それに続いて明久が玄関をくぐり、綾香の靴を揃えてから自分の靴を脱いであがる。

家の中から反応がないことを感じつつリビングへ向かった明久は、すでにソファでくつろぐ体勢の綾香へ声をかける。

「アンナはやっぱり虎吉おじさんについていったの？」

「うん。パパもママも今頃ドイツかな？学会とかで四月の終わりくらいまで向こうだってさ。筋肉バカのクセになにを発表するんだか」

明久に答えつつテレビの電源を入れる綾香。彼女の答えに明久は苦笑いしながらキッチンへ。

「……まあ虎吉おじさんの趣味や経歴考えると、数学者って感じはしないよね」

「大学卒業と同時に、フランスへ。なにを間違えたのか外人部隊に所属して戦場へ。除隊してからは数学者としての名前が多少売れて今に至ると。で、趣味は体を鍛えること。小学校の作文で本気で悩んだよ」

ソファから立ち上がり、自分もキッチンへ。そのまま“二人の”マグカップを出してインスタントコーヒーを入れる綾香。

「あれ？豆もう無いの？」

「パパのオリジナルブレンドだからね。こないだ使い切っちゃった」

明久の問いに肩をすくめる。それに苦笑いを返してリビングにプリンとスプーンを運ぶ明久。続いて二人分のコーヒーを綾香が運んできて二人並んで座るとお茶会が始まった。

「ん〜 プリンうまうま」

「そうだね」

銀色のスプーンでプリンを掬って口にする綾香。

顔いっぱいおいしいという気持ちをみなぎらせながら味わっていく。

綾香のプリンはミルクプリン。そして明久は上にモンブランの乗ったプリンだ。

お互い半分ほどに減ったところで綾香は自分のプリンを掬って明久に差し出した。

「ほいアッキー。こっちも食べてみなよ〜」

「ん？ あーむ。へえ、ミルクの柔らかい味わいが良いね」

差し出されたスプーンをくわえ、明久はミルクプリンを味わう。そんな明久を見ながら綾香は抜き取ったスプーンをしゃぶって、

明久のプリンへ蒼い視線を向けた。

「じゃあ次はそっちのちよーだい あーん」

「しかたないなあ」

明久は苦笑いしながら、モンブランとクリーム、そしてプリンにカラメルを絡めながらスプーンに掬って綾香に差し出した。

それをパクつきおいしそうに味わう。

そんな風にお茶会の時間は過ぎていった。

本日の夕食は綾香のお手製オムライス。

パエリアを知る以前の明久の好物だったこともあり、当時まだ小学生だった綾香はかなり練習した一品だ。少々焦げてるのがご愛嬌だが。

それに舌鼓を打ちつつ、二人で夕餉を楽しんだ。

食事も終わり、二人で片づけ、一緒に洗い場に立つ。

「今日、泊まっていくでしょ？」

「うん、今から帰るのも面倒だしね。そうしようかな？」

並んで洗い物をしながらそんなことを話す。

「じゃあアッキー先にお風呂しちやいなよ。それとも……何年かぶりに一緒に入る？」

小悪魔スマイルを浮かべ、隣の明久へ腰をぶつけてくる綾香。

「……さすがにお互い高校生でそれは無いっしょ」

「だよーねー あー。でも久しぶりにアッキーの象さん見たかったかも？ あれが羨ましくってさあ、取れないかどうか色々してたらぺろーんって剥……」

「ハイ！ 下ネタ禁止！」

綾香の暴走トークを遮る明久。しかし、綾香はその反応を面白がる。

「今更恥ずかしがること無いじゃん わりと全部見せ合ってるし」

「全部小学校低学年の時の話でしょっ！」

やや焦り気味に言う明久。

何か、そう言っておかないと非常にマズい気がしたからだ。

「ちえー。つまんねーの」

明久のノリが悪くて唇をとんがらせる綾香。

そのまま洗い物が終わって、明久を先にお風呂へ追いやり、自室を少し片す。

それが終わった頃には明久が風呂から上がり、綾香とタッチ。

その後は髪の手入れタイムだ。

「……明日はBクラスと対決だね」

「午前中には補給試験があるけどね」

髪を丁寧の手櫛で梳いていく明久と明日のことを話す綾香。

「まあ、テストはこの後の予習復習で対処すれば良いけど……」

「……根本君だね」

「……………うん」

根本恭二は学園内でも良くない噂の多い男子だ。

カンニングの常習犯、競争相手に下剤を仕込む、あげくは喧嘩に刃物だ。

「……………まあ、雄二がそうそう後れをとるとは思えないけどね」

小さく息を吐きながらつぶやく綾香。

「そうだね。むしろ、僕らひとりひとり何か仕掛けてこないか、気を付けないとね。ハイ終わり」

「そうね。ありがと　アッキー」

髪の手入れが終わり、明久に笑顔でお礼を言う綾香。その後ふたりに軽く勉強してから、綾香にせがまれ、彼女のベッドと一緒に寝た。

翌朝、やはり明久は床の上で目を覚ました。

一方そのころ。

「……………これで良かったのでしょうか？」

一枚の写真を前に、燈色の髪をドリルツインテにした少女がため息をついた。

昨日の騒動で、怨敵とも言うべき吉井明久に復讐せんと、学年一のクズの口車に乗ってしまった。

そして、決定的な瞬間が撮れてしまった。

約束した以上写真の一枚は手渡してしまったが、さらに要求された元データはもう無いと誤魔化したものの罪悪感は消えない。

彼女と仲が悪いわけではないのだ。ただ、吉井明久を処刑しようとする、邪魔をしてくる。不満はその一点のみ。

だからこそ。

この写真を撮り、あのクズ豚に渡してしまったことを、少女、清

水美春は後悔していた。

だい にじゅうはちもんだよん

「さて皆、補給テストご苦労だった」

「……………」

教壇に立った雄二が教卓に手を置いて皆に向かって言うが、クラス
スの反応はいまいちだった。

「……午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は
十分か？」

「……………」

雄二の言葉にも反応は微妙。

これには彼も苦虫を噛み潰したような顔になった。

少し思案し、ちゃぶ台に寝そべるようにダラッとした綾香へ顔を
向ける。

「…………夏目」

「んー？ あによー雄二」

返事はすれども顔は向けない。

それに構うことなく言葉を続ける雄二。

「昨日は俺が悪かった。許してくれ」

「……それは、何に対する謝罪？」

頭を下げ謝る雄二に綾香は蒼い瞳をジト目にしながら雄二を見、
そう訊ねる。

「……お前の友人をバカにして悪かった」

頭を下げながらしかめっ面になりつつも今一度謝罪する。

「……はあ。今度同じ事したら許さないからね」

「……わかった」

降参だと言わんばかりの表情で顔を上げる。

すると、綾香が勢い良く立ち上がった。

「さあみんな これからBクラスとの試召戦争だよ 殺る気は

OK？」

『イエアアーツ!!』

先ほどの静けさとは違って代わって大盛り上がりするそこで綾香が雄二の方を向いて目配せする。

すると男子どもが一斉に雄二の方を向いた。

「今回の戦闘は、敵を相手の教室の中へ押し込むことが最重要だ。従って開戦直後の渡り廊下戦は、絶対に負けるわけにはいかない」

「だ、そうよ」

『おおーっ!』

「そこで前線部隊は姫路瑞希に指揮を執ってもらい、その補佐役として、夏目綾香、吉井明久を任命する。野郎ども! きっちり死んできやがれ!」

雄二の言葉でクラスの綺麗どころである瑞希や綾香と一緒に戦えると知った前線部隊メンバーの意気が上がった。

「が、頑張ります」

「みんな、よろしく」

「……まあ、僕はおまけだね」

握り拳を作った両を胸につけるようにしながら意気込む瑞希に、右の人差し指と中指をそろえた敬礼しながらウインクする綾香。

ついでに明久も一歩前が出る。

その様子に、前線部隊の士気は最高潮に達していた。

今回の戦いに置いて重要なステップでもある渡り廊下戦。

ここを確実に獲るために、全戦力の八割に、二枚看板《瑞希と綾香》を投入するようだ。

高いモチベーションに主力の二枚看板。

渡り廊下戦は獲ったも同然だろう。

キーンコーンカーンコーン

昼休みの終了を告げる鐘が鳴り響き、それが開戦の合図となる。

「よし、行ってこい！ 目指すはシステムディスクだ！」

「サー、イエツサー！」

最後には威厳を取り戻したのか、雄二の指示に男子は従っている。その勢いを笠に着て、Fクラス前衛部隊は廊下を駆けた。

そのなかを綾香と明久は走り抜けた。

最強の存在である瑞希は、運動が苦手なため、先に綾香達が前線を構築しようと急いで前進したのだ。

おかげでふたりは一番乗りだ。

そこへBクラスの生徒が十人ほど並んで歩いてきていた。

その後ろには、総合科目勝負を承認できる、学年主任の高橋教諭の姿。

「これは、最初っからクライマックスかな？ 綾香」

「ふふん 上等よん 一気に行くわよアッキーっ！」

「了解だよ綾香！ 長谷川先生！ 吉井明久と！」

「夏目綾香が！」

「Bクラスに数学勝負を申し込みます！！！」

「承認します！」

ふたりに応え、長谷川教諭がフィールドを展開する。

通常のものより広いそれは、Bクラスの生徒を五人ばかり巻き込みながら展開された。

「試獣^{サモン}召喚！！！」

明久と綾香が、異口同音に言霊を紡ぐ。すると、大型の魔法陣が展開し、ふたりの召喚獣が召喚された。

それを見てBクラスのふたり、岩下律子と菊入真由美がひきつったような声を出す。

「あ、綾香と数学勝負なんて……」

「か、勝てっこないじゃない……」

綾香の友人で、その成績を知るふたりが絶望に打ちひしがれるの

を不思議そうに見ながら、他の三人も召喚獣を召喚した。

「なにやっつてんだ？岩下に菊入。最下層のFクラスのふたりなんて壁にすらならないだろう？ さっさと倒して奴らの前衛に備えるぞ！」

一人がそう声を上げるのに合わせ、他のふたりはうなずいた。

一方、律子と真由美は、召喚フィールド内で勝負を挑まれたら召喚獣を出さないと敵前逃亡したとして戦死扱いになってしまったため、あわてて召喚獣を呼び出す。

そして、点数が表示された。

『Bクラス 数学 野中長男171 金田一祐子159 里井真由子156 岩下律子209 菊入真由美171 VS Fクラス 吉井明久102 夏目綾香521』

「……500点オーバー?!」

「……ですよねー」

綾香の点数に、三人が驚愕し、律子と真由美が肩を落とす。

その隙をついて綾香は召喚獣に柳葉刀を投げさせた。ついでステップを踏んで踊り出す。

それに合わせて召喚獣もステップを踏み出し始め同時に腕輪が輝く。

すると、綾香の召喚獣の姿がブレ始めた。長い紐の先の柳葉刀もその輪郭をブレさせ七本ずつに分かれた。

その頃には綾香の召喚獣自体が七体に分身しており、ステップを踏む。

広いフィールドの中を、綾香の舞に合わせて十四の飛刀が舞う。それは二つの軌道をなぞる動きだが、分身の出現タイミングのズレ

によって軌道をなぞるタイミングが違う。一刀目二刀目をかわしても三刀目四刀目が迫り、それをしのいでも五刀目六刀目にくわえ、一刀目が襲いかかってくる。

絶え間無く襲いかかってくる刃を、操作に慣れない者が捌ききれぬわけもなく、為す術もなく切り刻まれていく。

フィールド内は、死の舞踊ダンスマカブルの嵐のようだ。

そんな中ですら、明久の召喚獣は無人の野を行くが如く駆ける。

何とか凌いだ相手に止めを刺し、綾香に近づこうとする者を排除する。

フィールド内は、まさにふたりきりの独演会。

美しいまでの殺戮の嵐によって、Bクラスの五人は戦死してしまい、残る五人もひるんだ。

そこへ続々と到着するFクラス前衛部隊。遅れて瑞希も到着する。戦いは、Fクラスが有利な形で始まった。

だい にじゅうきゅうもん……だと？

Bクラス先発隊の出鼻をくじいた明久と綾香だったが、Bクラス代表の根本の事もあり、戦況が有利なうちに教室の様子見に行く人員を選抜した。

明久、秀吉をはじめとした数人が前線から離れていく。

一方で前線を任された綾香と瑞希。作戦の要ともいべき瑞希を消耗させすぎないよう雄二に言い含められていた綾香は、必然的に矢面に立っていた。

だがそこで困ったことが起きていた。

『綾香ちゃんはこの君島が守る！』

『いやいやいや、この肉壁近藤こそが綾香ちゃんを守るにふさわしい！』

『バカを言うなこのオレ！ 朝倉こそが綾香ちゃんの騎士にふさわしい！』

綾香が戦闘を開始すると、Fクラスの面々が乱入してくるのだ。

綾香はこれに辟易した。

綾香の召喚獣の武器は、効果範囲が広い一対多で真価を発揮する武器だ。

反面、乱戦では使い難い。

ウロウロしている味方を避けて投げられる程操作に熟達はしていないし、中途半端な舞では威力が出せないばかりか、武器を破壊されてしまう可能性もある。

隣に立つのが明久なら良い。

明久なら、“当たるわけがない”と確信できるから。

しかし、他の人間の操る召喚獣では、当たってしまうかもしれない。

その思いが、綾香の動きを萎縮させていた。

だが、Fクラス男子たちにはそんなことを感じ取れるはずもなく、綾香に良いところを見せようと突撃し、返り討ちに合う者が続出。かえって綾香がフォローしなればならない局面が増えてしまい、召喚獣はみるみる消耗していった。

「ああ、もう！」

いらつきを隠せず、召喚獣に二本の柳葉刀を振らせる。

消耗したとはいえ、数学ならばいまだ243点の点数を誇る綾香の召喚獣に対し、150点程度のBクラス召喚獣がかなうわけもない。

流麗に振られた二刀は、片方で相手の剣を弾き、もう片方が胴をなぎ払う。

その一撃だけで光に還る敵召喚獣。

しかし、その隙を突いて二体が追加される。

「綾香ちゃん！」

「瑞希ダメ！」

思わず足を踏み出した瑞希を鋭く制する綾香。

「瑞希まで消耗したら、後の作戦に響きかねないから！　ここは我慢して！」

ここまで瑞希は指令官役に徹していたため、消耗はない。

ある種、その場にいるだけで相手に対してプレッシャーを与え、味方には瑞希が控えているという安心感を与えられる優秀な戦力でもあるのだ。

もし投入するにしても効果的、かつ決定的な場面で投入しなければ、無駄な損耗を招いてしまう。

ここを任されている以上、綾香はそれだけはしたくなかった。

迫るメイスを蹴り逸らし、グラディウスを左の柳葉刀で弾きながら右手の刃で胸板を貫く。

体勢を崩したところへ再度メイスが迫り、綾香の召喚獣の左肩へ叩き込まれる。

そのままはね飛ばされつつ、右の柳葉刀を投擲。見事相手召喚獣

の顔面に突き刺さり、光へ帰す。

点数は182点まで下がってしまったが、綾香の意志は衰えない。そんな彼女をBクラス陣営は突破できずにいた。

長谷川教諭の範囲の広い召喚フィールドで渡り廊下から中央階段までをカバーしているため、迂回が難しいのだ。

すでに綾香一人のために、Bクラスの先陣、中堅、併せて十人以上が戦死させられ、それに倍する人数が数学の点数を削り取られていた。

逆に、Fクラスの戦死者は片手で数えられる程度だ。

これも綾香の奮闘によるものである。

こうして前線に出ているBクラス生徒の数も減り、綾香は周りに指示して一気に押し込む準備を始めた。瑞希の火力で残りの戦力に大打撃を与え、潰走したところを追撃し、Bクラス戦力をさらに暫減するつもりなのだ。

しかし、そこでトラブルが起きてしまう。

『お前らそこで止まれ!』

『さもなきゃこいつに止めを刺すぞ!』

そんな声が響きわたり、Fクラスの面々が動きを止めた。

見れば英語Wのフィールドに、Bクラスの男子が二人と……。

「美波ちゃんっ?!」

瑞希が声を上げ綾香が、あちゃー。とばかりに顔を右手で覆った。そこにはBクラス男子のそばにへたり込んだ美波と戦死寸前まで削られ、武器を失い、刃を突きつけられた彼女の召喚獣の姿があった。

だい　さんじゅもんでがんす。

膠着状態に陥り、ほかのBクラス生徒は撤退を開始し始めた。

それを見た綾香が指示を出そうと口を開いたとき、従弟の声が聞こえてきた。

「綾香！　なにがあつたの？」

「アッキー！　そっちは大丈夫だったの？」

足早に綾香へ近づくと明久へ、彼女は驚きとともに問いかけた。

「なかなかやつてくれるよ根本君は。教室設備を破壊されたよ」

明久の言葉に綾香が顔をしかめる。

「相手の補給を断つ作戦ね？　常套手段ではあるし、効果的ね」

「うん。けど、やり方が半端だったからね。リカバリーは容易だよ。それより……」

言葉を切つて前を見る。

視線の先にいるのは優位に立つて得意げなBクラスの二人と、あきらめたかのように消沈する美波。

そして撤収を完了しつつあるBクラスの残存戦力。

「参つたね。追撃はもう無理そうだ」

「うん。出来れば残りも掃討しちゃいたかつたんだけどね」

ため息をつく明久に、綾香がうなずく。

「十六時には一時休戦になって、試召戦争に関するすべての行為が禁止になるから、その前になんとかしないと、回復試験も受けられなくなつちゃうんだよね」

「え？　そうなのアッキー」

驚く綾香に明久はうなずいてみせる。

それを見た綾香が思案顔になった。

「うーん、追撃戦後に数学の回復試験受けるつもりだったのに。それじゃあ余計に時間掛けられないわね。仕方ない」

「……島田さん、怒りそうだなあ……」

向こうで美波を人質に取ったまま、がなり立てているBクラス男子を見やり、明久は嘆息した。

それを横目で見ながら綾香が苦笑いする。

「ま、一発くらい殴られておきなさい」

「……そうしとくよ……」

彼女に肩をぼんぼんと叩かれながら肩を落とす明久。

気合いを入れ直し、顔を上げると前へ進み出た。

「島田さん！」

「よ、吉井！」

明久に声をかけられ、美波が珍しくしおらしい声を上げ、Bクラス二人が身構えた。
が。

「Bクラスの二人とも、島田さんを放すんだ。それが君たちのためでもある」

「なに言ってるやがるんだ？」

「バカの言うことなんか耳を貸すんじゃない」

明久の話に耳を貸そうとしない二人。しかし、明久は話を続ける。
「君たちの命のためなんだ！！」

「……！？」

明久の言葉に、二人がビクリと肩を震わせる。

「いいかよく聞くん。君たちが人質にしたソイツは、ただの女子じゃない。その一撃は岩をも砕き、巨木すらへし折る慮力を誇る魔人、“シマーダミイナミイ”と呼ばれる怪物なんだ！」

明久の突然の言葉に、美波もBクラスの二人も呆気にとられる。

そしてその後も明久によって、美波がどれだけ恐ろしいかの説明が続いた。

そこまで言われて彼女が黙ってるわけがない。

「よ〜し〜い〜、あんたねえっ！ 『瑞希のパンツを見て鼻血が止まらなくなっ保健室にかつぎ込まれた』って聞いて心配してやっ

たのに、なによその言いぐさはっ!？」

憤怒の形相ですさまじいまでのドス黒いオーラを放ち始める美波。その様子にBクラスの二人はビビり始め、ドン引き状態だ。

しかし、明久の方も。

「あ、明久君!？　ほんとに私のパンツ見たんですかっ?!　答えてくださいっ!！」

と、涙目な瑞希に詰め寄られていた。

そんな喧噪の中、綾香は須川と新田を連れて、少しずつ移動していった。

数学のフィールドからそつと英語Wのフィールドへ移り、タイミングを計る。

そして、美波の放つ殺気に当てられ、Bクラスの二人が怯んだ瞬間、行動に移った。

「試獣召喚サモン」

言霊が響き、デIFOオルメ綾香が召喚獣が顕現すると同時に二本の柳葉刀を投擲した。

横合いから現れた召喚獣の姿に驚くBクラスのふたり。その瞬間、柳葉刀が美波の召喚獣に剣を突きつけていたBクラス召喚獣の胴体へと一本が突き刺さり、もう一本は外れた。

素早くそれを、紐を引いて回収しつつ、もう一体の召喚獣へドロップキックをかました。

一体は光へ還り、もう一体は吹き飛ばされた。

「な、なんだとっ!？」

「くそっ!？」

吹き飛ばされた方は戦死しなかったが、綾香に続いて召喚した須川と新田の二人掛かりでとどめを刺していた。

「ぶっ……」

戦死したBクラスの二人が補習教師に連れて行かれるのを眺めながら明久は息を吐いた。

そこへ長く癖のある金髪を揺らしながら綾香がやってきた。

「お疲れ」

「なんとかなったね」

綾香のねぎらいに、苦笑い気味に感じる明久。その背後に怒れる猛虎が現れた。

その気配に、明久の顔から滝のように汗が噴き出した。

「……よ〜し〜い」

地獄の底から響きわたるような声に明久は身動き一つ取れない。

その肩に彼女の細い指がかかり、食い込んでいく。

「し、島田さん、ぶ、無事で良かったよ」

後ろを振り返る余裕すらなく、明久がそう言うと、肩に食い込む指の力がいつそう強まった。

「吉井！ よくもウチを化け物呼ばわりしてくれたわねっ！ また、彼女にしたくないランキングが上がっちゃうでしょっ！！ どうしてくれんのよっ！！」

「いや、あれは作戦……」

「問答無用！ 歯を食いしばりなさいっ！」

明久の肩を引っ張って振り向かせると、渾身の力を込めて右ストレートを放った。

だい　さんじゅうちもんさまです。

「ぐっ?!」

迫る拳を明久は避けようとせせず甘んじて受けた。

そして美波がもう一発とばかりに振りかぶった腕を、ほっそりとした白い指が捕らえ、第二撃を防いだ。

それは、長くて癖のある金髪の少女の指。

「離さないよ!　綾香!　ウチは吉井をボコらないと気が済まないのよっ!」

そんな彼女に美波は吠える。

「落ち着きなさいよ美波。戦死しないで済んだんだから良いじゃない!」

「冗談じゃないわよ!　何であそこまで言われなきゃならないのよ!　ウチだつて女の子なんだからね!」

そう叫ぶ美波の姿に、綾香は空いてる右手で頭を搔く。

「そりゃ普段からアツキーをボコろうとしてんだから当たり前じゃない?　それに、あれは美波を助けるためにアツキーがその場でもあつたけど。大体あんな嘘に引っかけた敵に捕まって、みんなの足を引つ張つた上に助けてもらつておきながら謝罪も礼も無しで殴りかかるつてどうなのよ」

「う、ぐっ」

綾香に指摘され言葉に詰まる美波。頭の上つていた血も下がり始めたようだ。

「後ね、どうしてもアツキーをもつて一発殴りたいなら、まずあたしをぶん殴ってくれない?　美波を怒らせるのにはあたしも同意したようなもんだし」

明久が美波を怒らせる話で相手の注意を逸らすのは分かっていた。

プロの交渉人や話術に優れているわけでもない一介の高校生の半端な交渉では二人同時に注意を逸らすのは難しい。

それゆえに明久は美波にも怒って貰うことでそちらにも注意を引かせるためにあんな話をしたのだ。

綾香もそれを察していたが、Fクラスで射程のある攻撃を繰り出せるのは自分くらいしか居ないため、交渉を明久に任せただ。

相談せずとも、互いのやること分かっているこそその分担だ。

「綾香、それは……」

殴られて顔の一部を赤くした明久が声を上げる。

「いいの。あたしもアッキーと一緒に殴られるつもりだったんだから。けど美波」

「……なによ」

「殴った後で良いから、みんなに迷惑を掛けたことを謝って、助けて貰ったことに礼を言いなさいよ？」

そう言われて、肩を落とす美波。

「……もう……いいわよ……」

顔を逸らしながらつぶやくように言う。そして、一度顔を上げ、頭を下げる。

「みんな、迷惑をかけてゴメン！ それから……助けてくれてありがとう！」

謝罪と礼を口にする美波。

それに対して、クラスメイトたちは笑顔で応じる。

そのことにホツとしつつ明久の方を見る美波。

「よし……」

明久に声を掛けようとして止まってしまった。

そこには、明久の殴られた痕にやわらかい表情で手を当てている綾香の姿があった。

二人とも、今まで見たことないような優しい顔をしている。

「大丈夫だった？ アッキー」

「うん、とっさに全身で“受け”だから、見た目ほどひどくはない

「よ」

明久の言葉に、綾香は小さくうなずいた。

その様子を見て、美波は我知らずにささやかな己の胸に手をやる。そこへ。

「美波ちゃんどうしたんですか？」

瑞希が声を掛けてきた。

「え？ ううん、何でもないのでよ？」

「明久君と、綾香ちゃん……ですか？」

瑞希の言葉に、体が震える。が、意を決して小さく頷いた。

「……そうですね。けど、覚悟はしておいた方が良いでしょう？」

そう言われて美波は瑞希の方を見る。瑞希は、困ったような笑顔を浮かべていた。

「私、あの二人とは十年ほど付き合いがあるんですよ？ だから分かるんです。二人の絆が。それに割り込むのは、とても大変ですよ？」

そう語る瑞希の横顔を見て、それから二人を見やる美波。

「……けど、ウチは諦めたくない」

「……。なら、がんばって下さい」

そう言つと瑞希は二人の方へ足を進めた。

その後ろ姿を見送り掛け、強くかぶりを振ると、美波は自分の両頬を両の手のひらではたき、彼女を追うように足を踏み出した。

だい さんじゅうにもんなんだなあ。

その後、FクラスはBクラスを教室内に押し込むことに成功し、戦況は膠着する。

その間、綾香は回復試験を受けるために教室へ戻っていた。

「で、ちやぶ台が足りない」と

教室の状況を見て、綾香はため息を吐く。

先ほどまでの渡り廊下戦において点数を消費した面々が回復試験を受けているのだが、根本の設備破壊の影響が少なからず出てきたことになる。

「ほかのちやぶ台は使いものにならんし、時間的にも具合の良い奴を探してる暇はないからな。おまえの数学も必要なカードだから試験を受けさせないわけにもいかない。幸い視聴覚室が空いたそうだからそつちを確保してある。すぐに行って回復試験を受けてきてくれ」

「……ほんとにギリギリじゃん」

ノートで何かをチエックしながらそう言ってくる雄二に綾香は時計を見ながら息を吐く。

視聴覚室へ行ってすぐに試験を受ければギリギリ十六時前だろう。

綾香は小さく嘆息してから軽く走り出した。

それから時間が経ち、ギリギリ十六時前に回復試験を受け終わつた綾香は息を吐く。

このまま戦争は一時休戦になるだろうと思いい、少し休んでから視聴覚室を出た。

「今日はどうしよっかなあ」
しばらく両親はいないので、ぷち一人暮らしみたいなおものである。明久の家に行っても良いし、一人暮らし気分を味わっても良い。そんなことを考えながら階段を上っていく。

そして三階へたどり着き、廊下へ足を踏み出したとき、見計らったように声が掛かった。

「よう夏目」

その声に立ち止まり、顔をしかめながらそちらへ振り向いた。

「……恭二」

四階へ続く階段の踊り場。そこに居たのはBクラス代表の根本恭二。

「……なんであんたがここに？ 休戦中って言っても大して時間も経ってないでしょうに？」

時間は十六時を五分ほど回った頃だ。休戦状態に入ってそうは経っていない。訝しげな顔になって彼を見る綾香。

そんな彼女の様子に、根本は口の端を歪める。

「お前に話があるんだよ。上階まで付き合ってくんねーか？」
そう言いながら、アゴで上を示す。

それに対して綾香は呆れと嫌悪を混ぜたような顔になる。

「……“また”あの話？ 何度も断って……」
「吉井って観察処分者のことだ」

拒否の態度を示して歩み去ろうときびすを返し掛けた綾香の顔に緊張が走り、足が止まる。そして再度彼を見やり蒼い視線を投げかけた。

「興味……あるだろ？」

勝ち誇った顔の根本をにらむ。が、何も言わずに階段に足をかける。

それを見た根本は得意げな顔で上階へと足を進めた。

「で、話って？」

四階に着くなり綾香は問いただした。しかし根本の余裕は崩れない。

「おいおいせつかちだな。積もる話も無しかよ」

「じよーだん。あんたと語り合う話なんてありやしないでしょ？」

にべもない綾香に根本は肩をすくめる。そして綾香を見下すようにしながら口を開いた。

「お前、あの観察処分者とイイ仲みたいだなあ」

「？」

言われた意味が分からず首を傾げる綾香。

「まさか、あんなバカと同棲してるとは恐れ入ったぜ」

「恭二？ あんた何言って……」

そこで根本は紙切れを一枚取り出して見せた。そこにプリンとさ
れているものを見て綾香は口をつぐんだ。

「最近のコピー機の精度は悪かあねえが、写真のコピーは微妙だな
だが見ればわかんذار？」

少しピンボケしているが、そこに写っているのは、マンションの
玄関先。驚く少年の頬に、マンションから出てきた金髪の少女が口
づけているシーンだ。

「これって……」

その紙をひったくった綾香は二の句が継げない。

「そこが観察処分者の自宅で、一人暮らししてるってのも調べが
ついで」

そう、少年は明久。金髪の方は綾香だ。このシチューエーション
には綾香も覚えがあった。

Dクラスとの戦争が終わった次の日の朝、仲直りできたのがうれ
しかった綾香は、出掛けにふざけて明久の頬にキスしたのだ。

「こんな不祥事が知れたら、大問題だ。しかも片や学園一の問題児。

片や学園でもよく目立ち、Aクラス入りも夢じゃない才女だ。体面を気にするこの学園で問題にならない訳がねえよな」

綾香の手に力が入り、紙がクシャリと音を立てる。

「まあ、成績の良いお前は嚴重注意で済むだろうが、観察処分者はどうなるかな？ 適当な理由付けて退学かもしれんな」

恭二の言葉に顔色が真っ青になる。

「違う！ 明久とあたしは従姉弟で……」

「へえそうかい。だが、それは年頃の男女が同棲する理由になんねえだろ？」

「同棲じゃない！ あの日はたまたま泊まって……」

綾香は必死で否定しようとする。が、必死になればなるほど根本の思いつぼだった。

「そんなの誰が信じる？ まあ良い。なんならこの事は黙っていてやっても良いぜ？」

恭二の言葉に綾香は目を細めながら彼をにらむ。

「……条件は？」

「あの観察処分者と縁切つて、俺の女メになれ、“綾香”」

言いながら根本は綾香に近づき、綾香の髪を一房手にして匂いを嗅ぐ。

その行為に生理的な嫌悪を感じて飛び退く綾香。

「恭二……あんた最低の人間ね……」

綾香のその言葉に、根本はいやらしい笑みを浮かべながら肩をすくめた。

「返事は戦争後で構わんぜ？ ま、当然お前が戦争で“どんな活躍をするのか”も答えの一環として見させて貰うけどな。ハハハハ！」
笑いながら階段を下りていく根本。

綾香はどうしようもない悔しさに、ただただ肩を震わせた。

クズの笑い声が聞こえる。

その話し声を耳にしたのは偶然。決して罪悪感から彼女の様子が気になったわけではない。

聞こえてきたのは、最低の“脅迫”。自分の撮った写真でここまでするクズ豚には殺意を覚える。

と、同時に、そんな奴の口車に乗ってしまった自身の浅はかさにもまいがした。

下りてきたクズ豚に見つからぬよう身を潜め、通り過ぎるのを待ち、顔を出すと彼女が下りてきたところだった。

その顔を見て、シヨックを受けた。

いつも底抜けの笑顔で周囲を明るくする彼女の顔が、乾いた荒野を覆う曇天のようになっていた。

そして、その蒼い瞳から銀の滴が一筋流れ落ちたとき、燈色の髪の毛の少女は死ぬほど後悔した。

だいさんじゅつさんもんじゃのづ。

日付が変わり、午前九時。

F対Bの試召戦争は、前日に中断したBクラス前から再スタートした。

昨日の戦争は綾香の活躍によって被害が最小限とも言えたFクラスではあったが、Bクラスの扉を挟んでの戦いでは小出しにせざるおえず、籠城戦の様相を呈していた。

そんな状況の中、Fクラスでは異変が起きていた。

いつもなら明るいキャラでみんなを鼓舞する綾香が、何のアクションも起こさないのだ。

それが気になり、戦いに集中できない者が続出し、さらには用意していた数学教師などもBクラス内へ引き込まれてしまい、Fクラスの被害を拡大していた。

本来なら、ここで綾香が火消しとして動くはずだった。

だが、顔を上げて動こうとする度に、息を呑んで立ち止まってしまふ。

必然、瑞希が代わりに火消しに走ることになる。

その状況に、隙を見て秀吉が明久に話しかけた。

「明久よ、綾香の様子がおかしいのじゃが、なにかあったのかの？」

「……ごめん。今回は本当に分からないんだ。昨日も一人でさつさと帰っちゃったし、今朝も一緒には登校しなかったから……」

帰りが別になること自体はそう珍しくない。綾香は交友関係が広いため、放課後に誘われることが多いからだ。

彼女は、友人を大事にするため、余程の事が無い限り誘いを断らない。

反面、朝は必ずと言って良いほど明久と一緒に登校する。 —

緒に登校できない時はどちらかに事情があるためなので気にもしないのだが、今回は様子が違っていた。

明久は心配になって綾香の元へ歩み寄った。

「綾香、どうしたの？ 具合でも悪いの？」

そう訊ねながら手を伸ばす明久。

それを。

綾香が避けた。

「え？」

「あ。」

思わぬ事に呆気にとられる明久。綾香もバツが悪そうにしながら顔を逸らした。

「なんでも……ないよ？ なんでも……」

うつむき、力無く答える綾香。

それを見た明久が口を開いた。

「……なにか、あった？」

その言葉に綾香は顔を上げる。

口を開き、明久へ向けて言葉を紡ごうとするも、目の端に映った嫌らしい笑みに、それはほどけて消えてしまう。

そして。

綾香は、

明久を、

そっと押して遠ざけた。

その拒絶のサインに、明久は頭を鋼鉄性の鈍器で殴られたかのようなショックを受けた。

そして見た。

綾香の、泣き出しそうな、苦しそうな、そんな顔を。

彼女のそんな表情に、明久の心は切り刻まれるように痛んだ。

そのまま離れていく彼女に声もかけられず、彼は立ち尽くした。

悄然となり、戦場の喧噪へ目を向けた。

と、奥に根本恭二に姿が見えた。

その目は真つ直ぐに“明久”へ向かい、勝ち誇ったような笑みを“彼”に向けながら手にしていたハガキ大の何かをポケットに突っ込んだ。

その根本の笑みに明久は違和感を感じる。まるで溜飲を下げたような笑み。

戦争が終わったわけでも無いのにするような笑い方ではない。

なら、おそらく自分と綾香のやりとりを見ての笑いだろう。

考え込む明久。

その時、後頭部に軽い衝撃が走った。

何事かと周囲を見回し、足下に転がる消しゴムに気づいて拾い上げる。

不意に、視界の隅に燈色がチラついた。

そちらを見ると、コロネのようなドリルロールの燈髪の少女が手招きしているのが見えた。

一瞬、戦況を確認し、戦線が崩れていないのを見てから周囲に気づかれぬよう彼女の方へ移動した。

「……やっとなりましたか豚野郎」

「……えと、何の用かな？ 清水さん」

そこに居た美春の言葉に、明久は警戒しながら答える。

美春は少し逡巡してから口を開いた。

「……あなたにお話しておきたいことがあります」

それを皮切りに語られたのは、あの卑怯者に乗せられた自身の話。そして、卑怯者と綾香の間で交わされた、言葉の陵辱。

美春の口から語られたそれに、明久の握った拳が白くなっていく。美春の話が終わったとき、明久の口の端から、こすれる音が響いた。

「豚野郎……いえ、吉井明久。美春のことは許さなくて構いません。綾香を……綾香を助けてやってくださいまし。どうか、どうかお願いします」

そう言って明久に頭を下げる美春。そんな彼女へ明久は優しく声をかけた。

「ありがとう清水さん。話してくれて」

「！」

思わぬ言葉に顔を上げる美春。そこにあつたのは少年の笑顔。

「大丈夫。綾香は必ず僕が助ける」

そう言って、明久はきびすを返し、戦場へと足を向けた。

だい　さんじゅうよんもんなんだね。

「明久！」

戦線へ戻った明久へ、よく知る声が聞こえてきた。

Fクラス代表の雄二だ。

損害が増えてきたため、本隊を率いてやってきたらしい。

「夏目がまともには戦ってないと聞いたんだが、何かあったのか？」

姫路の消耗が激しいと、この後の作戦に響くんだが……」

「ゴメン、ちよつと言えない」

離れたところでうつむく綾香を見やりながら明久に訊ねる雄二。

しかし、明久は真剣な表情で答えることを拒んだ。

「……そうか。だが、そうなるに敵しい。本来夏目に任せて温存するはずだった姫路の消耗が大きくなり始めている。これ以上は敗北に繋がりがねん」

「それってどんな作戦だったの？」

明久に聞かれ、雄二は口をつぐむ。両者の視線が絡まり、ほどなく雄二が白旗を揚げた。

「……根本への攻撃だ。扉周りの戦況はそのまま、みんなからのフオローも何も無しでだ」

つまり、圧倒的な火力を持って突破し、根本へと肉薄、強襲を仕掛ける。というものだ。

しかし、明久の表情はスッキリしない。

「……それ、もう一手有るでしょ？」

明久のその言葉に、雄二の眉が跳ねる。

「まさか、お前に気づかれるとはな……」

「雄二の作戦にしちゃあ雑なもの。でも、そうだね……姫路さんがやるはずのその役目……僕にやらせてくれないかな？」

そう明久に言われ、雄二は呆気に取られた。

「……できるのか？ お前に」

「出来るか出来ないかじゃない。やるんだよ」

明久の眼に宿る意志の力に、一瞬だけ雄二は吞まれそうになった。だが、すぐに口の端に笑みが浮かぶ。

「……いいだろう。ただし、姫路も同時に突入させる。二カ所の扉から同時に突入すれば、どちらかがたどり着けるかもしれないからな」

「構わない。とにかく僕は、あのクズ野郎をぶっ飛ばさないと気が済まないんだ」

そう言つて、瑞希のいるのとは反対の扉へ向かう明久。

その後ろ姿を見て、雄二は小さく息を吐く。

「……何があつたのか知らねえが、明久の奴、完全にスイッチが入つてやがる。こりゃあ、もしかするかもな」

つぶやくような雄二の声は、誰にも届かない。

お昼を挟み、戦争は未だに続いていた。扉前の攻防は終わる気配を見せず、戦いは膠着状態が続いている。

そんな中、お昼前頃からBクラスの空調機がぐずりだし、戦争の熱気がこもって教室内の不快指数はうなぎ登りだ。

たまらずすべての窓を開け、涼を取る根本。

「このFクラス（バカ）どもが、いい加減諦めるよな！ 暑苦しいのが雁首揃えやがって」

「ハッ！ Bクラスの代表様は軟弱だなあ？ おい。そろそろギブアップか？」

「ケッ！ ギブアップするのはそっちだろうが、負け組代表さんよお」

「ハハッ！ それがFクラスのことなら、もうすぐお前がそうなるな！」

「ハッ！ 口だけは達者だなあ坂本お。姫路の消耗もでかい以上、もうすぐ決着だ。一気に押し出せ！ お前ら！」

「いったん体勢を立て直すぞ！ Fクラス後退！」

雄二の指示に、片方のドアに集まっていたFクラス主力部隊が下がり、Bクラスの主戦力が廊下へと溢れ出る。

一方、蓋だけをしているような状態のもう片方のドアにはFクラス生徒三人にBクラスの生徒が三人ほど。

ほかのBクラス生徒は突破に成功したドアの方に向かい、Fクラスを追撃しているようだ。

この状況に、Bクラス生徒が嘲りの表情を浮かべた。

「へっ、お前らの本隊は押し出されたようだな。こっちもさっさとケリを着けて向こうに加わんねえとな。試獣召喚！」

召喚した相手に対し、Fクラスの三人の向こうから声が響いた。

「Fクラス、吉井明久が受けます！ 試獣召喚！」

言霊に応えて召喚獣が顕現し、木刀を構える。そして、明久が前へと出てきた。

「Fクラスなんざ誰が来たって同じだぜ！」

そう叫んだBクラス男子の召喚獣が、明久の召喚獣へと切りかかった。

その斬撃の軌跡が、明久にはまるでスロー再生のように見えた。

極度の集中により感覚が研ぎ澄まされる。

迫る刃を籠手で押し退け、木刀を正確に急所へ六度振るった。

ただ一瞬。

Bクラス男子の召喚獣は光に還った。

「は？」

いま、何が起きたのかわかっていないBクラス男子は眼をしばた

たかせる。

その目が閉じ、

そして開くと、

目の前に明久の顔があった。

明久が相手が目を閉じた瞬間に、一気に飛び込んだのだ。

「うおっ?!」

驚き、仰け反りながら、右足が一步、いや、半歩下がった。すると、彼となりの生徒の間に隙間が出来る。

そこへ明久が半身になりながら踏み込み、するりとすり抜ける。

「え?」

「嘘だろ?!」

ほかの二人が驚き、明久の方を見ると、滑るように明久が走り去るところだった。

「に、逃がすか……」

「それはこっちの台詞だ! 試獣^{サモン}召喚!」

追おうとする彼らをFクラスの三人が阻止する。

『ねえええもおおおおーっ!っ!』

「?! な、なんだっ?! よ、吉井だどっ?!」

走る明久の雄叫びに驚く根本。

二人の間に、近衛が一人割り込む。

そのことに根本が胸をなで下ろそうとした瞬間、主力が居た方のドア付近が赤く輝き、瑞希が肩で息をしながら姿を現す。

「う、嘘だろ……突破して来やがったのか……」

絶句し、窓の縁に腰をぶつける根本。

その時、ダダッツと大きな音が響く。

何事かとそちらを見れば、小柄で鋭く薄い気配の少年、土屋康太と保健体育の大島教諭が窓からロープを使って飛び込んできたところだった。

「……………Fクラス土屋康太が、保健体育勝負を……………」

「Bクラス山本慎也が受ける！」

「……………近衛」

苦々しい表情になった康太を後目に、転がるように逃げる根本。

「は、ざ、ざまあみろ、まだ終わるか！ こ、この根本恭二が、ま、負けて……………」

つぶやきながら這々の体で逃げる根本。その頭が、何かにぶつかる。

なんだ？ とばかりに見上げた根本の視界に、阿修羅が写る。

その向こうでは足止めしていたはずの近衛が戦死して連行されるところだった。

「ヒ、ヒイ」

尻餅をつきながら、情けない声を出しつつ後ずさる根本。

それを見下ろしながら、彼、吉井明久が口を開いた。

「Fクラス吉井明久が、Bクラス代表、根本恭二に数学勝負を挑みます！ 試獣召喚^{サモン}……」

「ま、まだだあ！ お前を瞬殺して、逃げきつてやる！ 試獣召喚^{サモン}……」

ふたりの言霊に従い、明久と根本の使役獣が現れる。

その点数は、“102”と“209”。ダブルスコアだ。

「し、死ねえっ……！」

根本の声に応じ、彼の召喚獣が、明久の召喚獣に襲いかかった。

次の瞬間。

明久の召喚獣が鋭く踏み込み、脇をすり抜けつつ一撃し、さらに背後から回し蹴りを放つ。

それを背に受けて吹き飛ばされたところへ踏み込み、木刀を突き込んだ。

もんどり打って倒れたそれへ、一撃を加え、バウンドしたのを利用しながら上空へと蹴り上げる。為す術もなく宙を舞う根本の召喚獣。

落下してくるそれに、明久の召喚獣が突きを入れた。その衝撃で空中静止する。

そこへ二撃目が、三撃目が襲いかかり、四、五、六と続く。

「うううおおおおおーっ！！」

明久の雄叫びに呼应し、そのギアは次第に回転速度を上げ始め、突きの連打になり、嵐と化す。

それが止んだとき、ぼろ雑巾となったそれが再び落ち始め、地に着かんとしたとき、明久の召喚獣が鋭く踏み込んで木刀でなぎ払った。その一撃がとどめとなり、根本の召喚獣が光の粒子となって消え去った。

『戦争終了！ 勝者、Fクラス！』

だい さんじゅうもんじゃん？

「そ、そんな……お、俺が観察処分者（最低のバカ）に負けるなんて……」

四つん這いになり呆然とする根本。その胸ぐらが掴まれ、引っ張り起こされる。

「根本」

「ヒツ?!」

目の前には憤怒の形相たる阿修羅が根本を睨み付けていた。

「お前が綾香に何をしたかは聞いている」

「……」

その言葉に青ざめる。

「二度は言わない。良く聞け」

「……」

この阿修羅のごとき表情の少年の普段からは想像できないような声。それは、すべてを殺し尽くす鬼神の如し。

そこから発せられる殺気に当てられ根本は竦み上がった。

「お前が綾香を脅すのに使った写真を寄越せ。コピーも全部だ」

「……」

圧力を増していく視線に、涙目で壊れたように首を縦に振りながらズボンのポケットの中から写真を取り出す。

それを阿修羅にあっさりと奪われる。

「それから、金輪際、綾香に関わるな。さもないと……」

「……」

膨らむ殺意に涙が溢れ、鼻水も出始める。

「ツブす」

言の葉とともに叩きつけられた気配に、根本の奥底で何かが折れ、股座の辺りに黒い染みが広がり、泡を吹きながら失神した。

「明久、なにやって……」

「悪い雄二。僕は用事があるから後よろしく」

明久と根本の様子に、雄二が声をかけながら明久の肩を掴んで振り向かせる。そして、その顔を見て雄二は絶句した。

だが、明久は関係ないとばかりに雄二の横を足早に抜けていく。

その背中に思わず視線を走らせるも追う気にも、声をかける気にもならなかった。

「……なんて顔してんだあいつは……アレじゃまるであいつの方が悪鬼羅刹じゃねえか……」

つぶやく言葉は誰にも聞こえない。ただ、雄二の耳にはつきりと残った。

勝利に沸くFクラスの面々。

対してBクラスはお通夜状態だ。

そんな悲喜こももからは離れた所に、彼女は佇んでいた。

暗い表情でうつむき、その特徴的な、ポリウムのある金髪もくすんで見える。

きびすを返し彼女はどこかへ歩き出そうとした。

そのとき。

「綾香！」

この世でもっとも近い少年の声に、綾香は足を止めた。

そして振り返り彼を見る。

その顔を見て、体が少し強ばった。

「根本君とは話を着けた。もう、心配はいらないよ」

そう言ってくる彼に、悲しそうな顔をしながら近づく綾香。

「綾香？ どうし……」

湖面に空を写したような瞳で最後まで言わせず、彼の両頬にそつと両手を添える綾香。

「明久、怖い顔になってるよ?」

言いながら、小さく笑いつつ明久の頬を揉み始める綾香。

それによって明久の顔の強ばりがほどけていき、険がとれていく。

「……綾香」

ほどなく、いつもの緩い空気を取り戻す明久。それを感じ、綾香は彼の両頬を摘んで左右に引っ張った。

「ぴろーん」

「い、いひゃいよはやひゃ」

「プ」

「?」

「プフフツ」

突然吹き出した綾香に、明久も困ったように笑う。
と。

金糸がふわりと舞った。

彼に体を預けるように飛び込み、ぬくもりを確かめる綾香。癖のある金色の髪が、明久の鼻先をくすぐる。

明久はそのまま綾香の背に手を回し、抱きしめた。

その力が強くなって、綾香は息を漏らす。

「ん。ちよつと痛いかも……明久」

「じゃ、緩める?」

「んーん。もつと、強くして……」

ねだる綾香に、明久は力を込めて抱きしめる。綾香は、その体を締め付ける痛みと、彼の体温と、匂いに心地よさを感じながらその身をゆだねた。

「……明久」

「ん?」

「……ありがとう」

「……うん」

だい　さんじゅつろくもんじゃん

その後の戦後対談で根本は特に反抗することもなく唯々諾々と雄二の言うことを聞き、女装してAクラスに向かった。

すでに心折れ、尊厳すら無くなった彼はおどおどしながらAクラスに入っただけならいい。

それでもBクラス内にすら彼に同情するような物好きはおらず、ただただ白い目で見られるのみだった。

「さて、帰ろうか」

終戦後、先ほど明久が綾香を抱きしめてるシーンを見た秀吉と美波がアレな事になっていたが、周りを気にするでもなく明久が綾香に告げる。

「おう。帰ろっか、アッキー」

応える綾香の声にはいつもの張りはないが、表情は明るい。

連れだつて教室から出ていく明久と綾香。また明日　と告げた彼女に瑞希は軽く手を振って応えていた。

「……あのふたり、あれで付き合ってたのよね？」

すでに敗北感を漂わせながら美波が瑞希に訊ねると、彼女ははつきりうなずいた。

「ええ。少なくとも綾香ちゃんと明久君にそのつもりはないみたいですよ？」

「……それでなんであんなにベタベタ出来るのよ……」

「……綾香ちゃんと明久君にとつては、ふたり一緒にいることが、ひとりであるより何倍も自然なんです。ふたりの間に、距離なんて無いほどに。ただ……それだけなんですよ」

ふたりの背をまつすぐ見送り、瑞希は微笑む。

その表情に美波はおもわず口を開いた。

「瑞希は……」

「はい？」

「瑞希はいいの？ それで。吉井の事、好きなんじゃないの？」

美波に問いかけられ、瑞希は眼をしばたかせると困ったように笑いながら答える。

「ええ。大好きです」

それを聞いて美波は一瞬息をのんだ。

「じゃ、じゃあ……」

「けど、綾香ちゃんの事も、同じくらい好きなんです」

美波が言い募ろうとするのを制するように瑞希は告げる。

その答えと表情に、美波は何も言えなくなってしまうた。

教室を出た綾香と明久だったが、昇降口で待ち伏せていた美春が、綾香に謝るといふイベントが発生するも、綾香自身はすでに明久が許しているなら。と、彼女を許した。

それから少し日が傾き始めている帰り道をふたりで並んで歩く。

と、不意に綾香が口を開いた。

「なあ、アッキー。今日はあたし……」

「泊まっていきなよ」

綾香に最後まで言わせず、明久が告げた。

その言葉に綾香は立ち止まってしまふ。

「だ、だけど……」

逡巡する綾香に振り向き、明久は笑顔になる。

「騒ぎたい奴には騒がせればいい。僕は今日、綾香と一緒に居たいんだ」

その言葉を受けて、綾香も笑ってみせた。

「……明久。……うん。あたしも明久と一緒に居たい」
はにかみあうふたり。
そして明久が手を差しだし、綾香がそれをとる。
並んで歩き始めたふたりの影が重なった。

本日は吉井家のマンションへ帰宅したふたり。
そろって部屋着に着替え、本日は勉強から始めた。
とは言っても、翌日の補給試験に合わせた予習復習だけでは合
たが。

リビングのテーブルにふたりで勉強道具を広げ、肩を寄せ合い…
いや、触れ合わせながら二時間ほど勉強する。

それが終われば今度は夕食の準備だ。
ふたり並んでキッチンに立ち、手順を確認するまでもなく作業を
分担して調理していく。

「タッ」

鼻歌交じりで野菜を切っていた綾香が小さく声を上げ、明久がそ
ちらをみる。

「どうしたの？ 綾香」

「やっちゃった」

苦笑いしながら左手を上げると、中指から赤いものがこぼれ始め
ていた。

「どうやら軽く指先を切っただけらしい。」

明久はコンロを止めると、すぐに綾香の手を取り、その指を口に
含んだ。

「んっ……」

傷口に軽い刺激を感じ、綾香の口から軽く息が漏れる。
それから絆創膏で処置して調理を再開するふたり。
そこからはとくに問題もなく料理は完成した。

本日は白身魚のバターソテーにサラダ、ひじきの煮付けとなっている。味噌汁は長ネギと豆腐だ。

ふたりで夕餉を楽しみ、食事が終わったら軽くコーヒープレイク。ふたりでソファに並んで座り、綾香は明久に寄りかかるようにしてくつろぐ。それに対して明久は嫌な顔ひとつせず彼女の重さを受け止めていた。

そんな時間を満喫したら、明久は洗い物。綾香が風呂掃除をして湯張りだ。

沸かした風呂に明久を先にやり、綾香は軽くリビングを片づける。程なくして風呂からあがってきた明久と交代で風呂場に向かう綾香。

上げればお気に入りの髪の手入れタイムだ。それを思うと普段より丁寧に髪を洗ってしまう。長くて癖のある髪を洗うのは大変なのでいつもはそんなに洗うのだが、泊まりの時は気にならなかった。そして、風呂から上がると、ドライヤー片手にリビングへ向かう。ぼんやりテレビを眺める明久へいつものようにドライヤーを渡し、彼の隣に横向きで座る。

ドライヤーで乾かし、手櫛で梳いてくれる感触が気持ちよく、綾香は晴れ上がった空のような目を細める。

不意にドライヤーが止まり、背中に何かが押しつけられた。何かと思って首を巡らすと、明久が綾香の髪に顔を埋めるようにして寄りかかってきていた。

「ア、アッキー？」

どうしたのかと思いい声をかけるが反応は無かった。代わりに軽い寝息が聞こえてきた。

「……しょうがないなあ明久は」

そうして苦笑いしていると、首の付け根辺りにくすぐったいような刺激を感じ、密やかに声が漏れる。

今一度首を巡らし、横目で彼を見ると、髪に埋もれながら綾香の首の付け根の辺りに明久が吸い着き、甘噛みしていた。

その無邪気そうな顔を見て、綾香は小さく笑う。

「……今日はいっぱいがんばって、疲れちゃったんだね」
そうつぶやき、綾香はそのまましばらく、彼の重さと首元の刺激を堪能した。

小一時間ほどで一度目を覚ました明久。まだ軽く寝ぼけている彼を部屋のベッドに引っ張っていくと、明久はそのままベッドに倒れ込む。

綾香はそんな彼を仰向けにして掛け布団を掛けてやり、自分も同じベッドへ潜り込んだ。

ベッドの中で、明久に覆い被さるように寝顔をのぞき込む蒼い瞳。

「……明久、本当にありがとう」

つぶやき、彼の額に口付ける綾香。

そして唇を離して軽く微笑むと、彼の胸板を枕代わりにして意識を落とした。

だい　さんじゅつななもん……にゃふう……。

翌朝、差し込む朝日に少年のまぶたが震えた。

「ん……ん」

まだまどろみの中にある頭は起床の信号を出さず、寝返りを打って意識を閉じようとした。

が。

体が……というより腰の辺りが何かにがっちりホールドされており、寝返りが打てなかった。

それどころか下半身に何か重しが乗っているようでもある。

しかもそれはとても柔らかく、暖かかった。

さらには朝の生理現象に柔らかい何かが載っかっており、感覚的にこそばゆくてヤバイ。

明久は、何だろうと思いつき身を起こす。すると大きく膨らんだ掛け布団がはだけ、ポリウーームのある金色の毛玉があらわれた。

「……………え？」

それが“誰”であるかに思い至った瞬間、明久の頭が覚醒する。そして掛け布団を一気に剥がすと、驚愕の光景が目飛び込んできた。

明久の腰回りを両腕でがっちりホールドし、その足の間で丸くなりながら、彼の“朝の生理現象”を枕代わりにした金髪碧眼の従姉、夏目綾香の姿が現れたからだ。

「……………う、うん」

布団がはぎ取られ、明るくなったことで、顔を“枕”に擦り付けるようにむずがる綾香。

「って！　これはダメだあっ……！」

ヤバい刺激にあわてて綾香の腕を振り解いて離脱する明久。

それによつて綾香は目を覚まし始めたようだ。

「ん〜？ もうあふあ〜？」

寝ぼけ眼で身を起こし、軽く伸びをしながらあくびをする綾香。まだ眠いようで、ぼんやりと明久を見ながら寝間着代わりのフリ―スに手を突っ込み、腹をバリバリ掻きつつあくびを噛み殺す綾香。と、その動きが止まり、蒼い瞳が明久のある一点を見つめる。蒼い目が細まり、口が弧を描く。

それを見た明久は嫌な予感がして、冷や汗を流した。

ス、と綾香が四つん這いになりながら明久の方へにじり寄る。

「んふふ〜　ねえ？　アッキー」

言いながら妖しく笑う綾香。

明久はそんな彼女を警戒しながら後退するが、すぐにベッドの端へ追い込まれてしまう。

「な、なになかな？　綾香」

ひきつるような笑顔を浮かべながら返事を返す明久。

それに構わず、綾香は四つん這いのまま一步一步近づき、その度に彼女に実る、二つのたわわな果実が揺れるのがフリース越しにもわかる。

そうして近づいてくる綾香に、危険を感じた明久が、ベッドから降りようと体をズラした瞬間、一気に近づき、彼にのしかかった。

「ちよっ?!　綾……」

抗議しようと声を上げ掛け、下半身への刺激に硬直する。

「おー、結構堅いな」

明久のその反応を見ながら小悪魔スマイルを浮かべる綾香。

「こんなに立派になっちゃって」

ニンマリ笑いながら綾香がその白い手で、さらに刺激を与えようとした瞬間。

「ふんぬっうおおおおーっっっ!!!」

雄叫び上げつつ明久は強引に彼女を引き剥がすと脱兎の如く部屋から逃げ出した。

「あ、あれ？」

あまりの明久の必死さぶりに呆気にとられる綾香。

「……もしかしてあたし、やり過ぎた？」

呆然とつばやき汗が一筋こめかみを伝った。

「文月学園に続く通学路。

不機嫌そうに歩く明久の周りを、綾香が明久の顔をのぞき込んだりしながら、うろろろしつっ進む。

その様子は、まるで大型犬が飼い主のご機嫌を伺うように周りをうろつくようにも見える。

「なあ、アツキー。悪かったって」

「いや、あれはシャレになってない」

謝る綾香に対して明久はにべもない。

それを見て綾香は困りきってしまう。

「だから悪かったって。ごめんってばさあ。あゝきゝひゝさあゝ」
「だんだんと泣きがはいり始めた綾香を横目で見て、明久は嘆息した。

「……はあ。もうああいう……えっと、破廉恥なイタズラはしないように」

「！ うん」

明久の言葉に綾香の顔が花が咲くようにほころび、彼の腕に抱きついた。

「うおっとお、もう、仕方ないなあ綾香は」

笑顔になった綾香を見て、明久も顔をほころばせる。

綾香は周囲の目を気にもせず、明久の腕をとり、自分の腕を絡めると彼を引っ張るようにして歩きだした。

「~~~~~」

上機嫌で鼻歌を歌いつつ自分を引っ張る綾香の横顔を見て、明久

は優しく笑った。

だい さんじゅうはちもんじゃけん

澄んだ飴色のスープに二本の箸がつっこまれ、そこから麺をすくい上げる。

それが小さく上品そうな唇へと近づくと、先ほどまでの上品さが嘘のように大きく広がって、麺にパクつき唇をすぼめる。
そして……。

ズゾゾゾゾー……ッ!!

っと、派手な音を立てながら麺が口の中へ吸い込まれていき、最後にはじっこが、ちゅるん と唇の奥へ吸い込まれてしまう。

満面の笑みを浮かべながら、スープのしっかり絡んだ麺を味わい、咀嚼する綾香。

「ふんめー……っ やっぱラーメンは醤油だな」

口の中に未だ麺が残っているにも関わらず、隣の席の少年へその声をかける。

少年、吉井明久はそんな楽しげに食事をする蒼い瞳の従姉の姿にクスリと笑う。

「ほら、行儀悪いよ？ 綾香」

そう言って、自分の昼食であるチャーハンにレンゲを差し込み、すくい上げると口に持っていく。

本日は、Bクラス戦で消耗した点数を補給する補給試験で一日埋まっていた。

時間内問題数無制限という体力と集中力に喧嘩を売るかのような文月学園の試験は過酷だ。なにしろ時間が来るまで解き続けなければ

ばならない。午前中の試験が終了した時点で、Fクラスの生徒達は、かなり消耗しており、昼休みになると同時に失ったエネルギーを補充すべく飯を食いまくる。

そんな中で、綾香は明久を学食まで連れ出し、食事をしているわけだ。

そんな二人に近づく影二つ。

「またふたりで食べてるの？ やっぱ仲が良いわね？」

「おひさ、綾香。一学期が始まったばかりなのに暴れまくってるわね？ Fクラスは」

その声に綾香が顔を上げれば、彼女がとても仲良くしている、Cクラス代表の小山友香とEクラス代表の中林宏美が揃っていた。

「やつほ ゆっか それにヒロリンもおひさ」

「ハイ、綾香。となり良いかしら？」

「ヒロリン言うな！ まったく……」

綾香に、良いよ　座って座って　と言われて着席する友香と宏美。

それぞれの手にしたトレイに載るのは、友香はサンドイッチとミルク。宏美はカツ丼だ。

そのメニューを綾香の蒼い視線が捉え、不思議そうな顔になる。

「いつも思うけど、ゆっかって運動部のわりには小食だよね？」

「そうよね。あたしなんか部活の後も、おながが空いて仕方ないのに」

綾香の問いに、宏美が同調する。すると友香は得意げな顔になった。

「ま、燃烧効率良いからね。それより、Bクラスに勝ったんでしょ？ おめでとう。まだ設備入れ替えてないけど、これからかしら？」

「よくやるわよねえ、Fクラスも。けど、Bクラスに勝ったのは素直にすごいと思うわ。おめでとう綾香。同じ旧校舎仲間がいなくなるのはさびしいけど、仕方ないわね」

代わる代わる祝福してくれる二人に、綾香と明久は苦笑いを浮か

べた。

その意味が分からず、友香と宏美は顔を見合わせる。

「あはは、Bクラスとは設備交換しなかったんだよ、ゆっか、ヒロリン。あたし達が狙ってるのは……Aクラスだから」

二人にそう言いつつも後半さすがに声を潜める綾香。

それに対して友香と宏美は目を丸くする。

「え、Aクラスって……」

「本気なの……」

信じられないという顔で綾香から向こうの明久へ視線をかえる友香と宏美。それを受けた明久が、苦笑いしながらも右の人差し指を立てて口にあてたことから事実と認識する。

「む、無茶にも程があるわよ？」

「いくら下が無いからって無謀すぎない？」

代表を務めていることもあり、友香と宏美はFクラスの無茶無謀の挑戦にかぶりを振る。

しかし綾香は笑ったままだ。

「うちの代表には、考えがあるみたいよ？ うまくいけば来週には豪華設備かな」

冗談めかす綾香だが、友香と宏美はまるで笑えなかった。

「……正直勝てるとは思えないけど……」

「……ま、まあがんばってちょうだい……」

微妙な表情でエールを送った二人に笑顔を向ける綾香。

ラーメンを食べ終わり、デザートプリンへと食指を伸ばした。

そんな綾香と隣の少年を見つめる目。

『……夏目綾香。雄二は渡さない。絶対に』

『くっ、吉井君。なんで君の隣にいるのがそんな下品な外人なんだ

……

不穏な気配に、綾香の身が震えた。

だい さんじゅきゅんていじやる。

補給試験も終わり、明久と連れ立って帰ろうと昇降口へ向かう綾香。

と、横合いから声がかかった。

「吉井、すまんが観察処分者の仕事だ。ちょっと来てくれ」

「あ、はい……。そういう事みたいだから綾香、先に帰ってて良いよ?」

西村にそう言われ、少し嫌そうにしながらも了承する明久。

そのまま綾香に先に帰宅するように言うが、彼女は首を振った。

「ううん待ってるよ。鉄人せんせいいつもみたいにご一緒して良いかなあ」

「西村先生だ。ま、良かろう」

一緒に行くという綾香に、西村は注意するも、仕方がないという様子で許可を出す。

本日の作業はガラクタの運び出しとのことだ。初日のFクラスの教卓や、Bクラスに破壊され修理不能になったちゃぶ台がメインだ。

「よし、承認だ」

西村の声と共にフィールドが展開される。

そして廃材の山を前にして、明久が軽く息を吐いた。

「ふう……んじゃ、ちゃつちゃとやりますか」

「おう がんばれアッキー」

気合いを入れ直した明久の後ろで綾香が応援する。

「試験召喚!」

明久の言霊に従って召喚獣が顕れ、作業を開始する。

「てっちゃんせんせいあたしも良い?」

「……またいつものか。まあ良かろう」

西村はニコニコ笑いながら聞いてくる綾香に嘆息しながらも許可

を出す。

「やった　　サーモン 試獣召喚つと」

綾香の言霊に導かれ、彼女の召喚獣が姿を顕した。

そしてそのままステップを踏み始める召喚獣。

「あ、そーれ　　がーんばれがーんばれ、あ・き・ひ・さ　　ほい

」

踊る召喚獣と一緒に応援する綾香。

その光景に、明久が小さく笑う。

そんな彼らを見て西村も苦笑いを浮かべた。

「しかし、召喚獣を踊らせて応援とはな。よくわからん考えだ」

「だってせっかくの召喚獣なんだし、殴り合わせるだけじゃつまらないじゃないですか　　よっと」

不思議そうに言う西村に、綾香は楽しげに答えながら今度は二本の柳葉刀でジャグリングを始めると、廃材を抱えて歩きだした明久の召喚獣の後をついて歩き始めた。

ゴミの集積場まで持っていくため、西村がフィールドごとついていくからだ。

歩きながらもジャグリングは止まらない。

「……器用なもんだ」

「去年からやってますしね慣れました。あ、そーいえばこの間聞いた件どうでした？」

「物理干渉の件か？　設定変更自体は可能だが、権限は学園長にか無い。まあ無理だな」

「そっかあ。ジャグリングの数増やしたかったんだけどなあ」

「ざーんねん。とつぶやきながらも召喚獣はジャグリングしながらステップを踏み始める。

「……むむむ？　　やっぱ難しい……」

眉根を寄せながら召喚獣を操作する綾香。

そうしている間にも明久の仕事は順調に進んでいき、程なく終わった。

「よし、これで終了だ。気を付けて帰るんだぞ」

西村の声に、それぞれ返事をしながら帰途につく明久と綾香。少し遅くなってしまったため、夜の帳が降り始めていた。

「暗くなっちゃったね？ どうする？」

「うん、今日も泊まっていこうかな」

今日これからのことを訊ねる明久に、綾香は笑顔で答えた。

それにうなずき、二人寄り添うように歩きながら明久の自宅マンションへ向かう。

「ただいま」

「ただいま」

誰もいないと分かっている口に出してしまう。

二人そろっているときならなおさらだ。

本日の台所作業は綾香が担当。

明久は掃除洗濯だ。

そうして夕餉の時間となる、本日は肉じゃがにほうれん草のおひたし。味噌汁はなめこだ。

さらに綾香はどんぶりに納豆ニパックに卵とのりをぶち込み、醤油をかけてかき混ぜる。

「ふーん ふーん ふーん」

「ごはんに山盛りの納豆を掛けて混ぜ合わせ、うまそうに頬張る綾香。それを見た明久が苦笑いを浮かべた。

綾香がそれに気づき、首を傾げる。

「いや、綾香みたいに外国人然とした人が納豆を美味そうに頬張っているのって珍しいからさ」

「ふえつにふいーじゃんひゃー。あふあしはふあっふあうふひふあんふあし」

「綾香、行儀悪いよ？」

口いっばいに頬張ったまましゃべる綾香を明久が注意する。

二人きりだが楽しい夕餉の時間は過ぎていった。

入浴タイムを終え、綾香の髪のお手入れタイムも終わった二人はまったりタイムだ。

ソファに座った明久の足の間に納まるような形で、カーペットの上に足を放り出した綾香が座る。

長くてくせつ毛なポリウーームのある金色の髪が明久の腹の辺りを覆うように広がっていた。

ふたりにバラエティ番組を眺めながらくつろぐ姿は自然だ。

時折、綾香がウケて笑いだし、釣られるように明久も笑う。

手持ちぶさたな明久の手が、なんとなくしに綾香の髪をひと房もてあそび、気づいた綾香が蒼い瞳で見上げてくる。

一瞬、目が合うが、テレビから聞こえてきた笑い声に、綾香がそちらを見て笑い始め、明久も一緒に笑う。

その間も、明久の手は、シルクのような金糸をもてあそび続けた。そんな緩い空気を満喫し、綾香が生あくびをしたのを見計らった明久は、そろそろ寝ようか？ と、綾香に促し、彼女がうなずいた。

明久が自室のベッドに入って、電気を消そうとすると、部屋のドアがそつと開いて、空の蒼さを見せる瞳がのぞき込んだ。

綾香だ。

寂しそうな、しかし迷うような眼差しで明久を見つめる。

その意味するところに気づいた明久は苦笑いしながら掛け布団をはだけ、ぼんぼんとベッドを叩いた。

すると見る見るうちに綾香の顔が輝き始め嬉しそうに小走りですっどまで近づき軽く跳躍して寝っ転がるようにしてベッドに飛び乗った。

小学生の時なら広がったベッドも、いっぱしの高校生二人が寝るには、少し狭い。必然、体を寄せ合う綾香と明久。

大きめの枕に、二人で頭を乗せ、鼻先に相手の体温を感じる。
手と手を絡め、額をくつつけるふたり。

「いよいよAクラスとだね」

「うん。強敵だよ」

「今度はあたしもがんばる」

「うん、一緒がんばろう、綾香」

「それじゃお休み　明久」

「おやすみ、綾香」

そして翌朝。明久は床の上で目を覚ました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7557x/>

バカとテストと召喚獣 ~ 蒼い瞳の従姉 ~

2011年11月28日07時45分発行